

弓張平B遺跡

第3・4次発掘調査報告書

山形県教育委員会

1979

弓張平B遺跡

第3・4次発掘調査報告書

山形県教育委員会

弓張平遺跡調査団

1979

序

弓張平は出羽三山のひとつ、月山のふもとにひろがる高原台地であります。この地に、昭和44年に国が発表した「新全国総合開発計画」にもとづき、奥羽山系レクリエーション基地の中核をなす「弓張平公園」が造成されることになりました。

山形県教育委員会では、昭和51年度に本地区一帯の分布調査を実施し、旧石器時代の遺跡を中心に11の埋蔵文化財包蔵地を確認しました。これらの遺跡のうち現状保存の困難なものについては、発掘調査によって記録保存をはかることになりました。弓張平B遺跡もそのひとつで、昭和52年8月と10月に1次・2次の発掘調査が行なわれました。上層から有舌尖頭器を伴う石器群が、また、下層からはナイフ形石器を伴う石器群が出土し、旧石器時代から中石器時代にかけての貴重な遺跡として注目をあびることになりました。今年度の3次・4次の発掘調査で、上層の文化層が2分されることが明らかになるとともに、それぞれの文化層の資料も豊富になり、第4氷河期末葉から後水期初頭にかけての先人の歩みを探るうえでの重要な資料を得ることができました。

山形県教育委員会では本遺跡の重要性に鑑み、関係部局と再三にわたる協議を重ね、発掘調査を継続するとともに、一部盛土によって現状保存をはかることになりました。近年、県民福祉の向上を目的とした諸開発事業と埋蔵文化財とのかかわりはとみに増加の傾向にあります。諸開発事業と国民の遺産としての埋蔵文化財の保護との間には多くの問題が山積されております。この両者の調整を行い埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会では今後共一層の努力を続ける所存でございます。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

最後に、本報告書の刊行にあたり、調査を担当された山形大学加藤 稔講師ならびに調査員各位と山形大学学生諸君に深甚の謝意を表すとともに、多大なる御協力と適切な御指導を賜った関係各位に心から感謝申し上げるものであります。

昭和54年3月

山形県教育委員会教育長 吉村敏夫

例　　言

1 本報告書は、山形県西村山郡西川町にある弓張平（ゆみはりだいら）B遺跡の第3・4次調査の発掘調査報告書である。調査は、奥羽山系レクリエーション都市『弓張平公園』造成に係るため、山形県教育委員会が主体となり、昭和53年7月28日～10月13日（延33日間）の期間実施された。

2 調査体制は、次の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

担当者 加藤 稔（山形県立山形工業高等学校教諭兼山形大学講師）

事務局 山形県教育庁文化課

調査協力 西川町教育委員会

3 使用した写真は、加藤 稔（遺物）、青木敏雄（調査記録・顕微鏡写真）が撮影した。

4 挿図に示した出土遺物は現寸、もしくは2分の1の縮尺を基本とし、それぞれスケールを示した。

5 本書の編集は加藤 稔が担当し、佐々木洋治（文化課技師）が補佐した。執筆・図版作成は加藤 稔・宇野修平（山形県立谷地高校教諭）・高橋郁夫（大江町立大江中学校教諭）・荒木利見（西川町立西山小学校教諭）、調査補助員会田容弘・青木敏雄・荒井格・矢口広道・山口博之・及川智子（以上山形大学学生）が担当した。分担は文末に記した。

6 発掘調査および本書の作成にあたり、柏倉亮吉（山形大学名誉教授）・伊東信雄（東北大学名誉教授）・芹沢長介（東北大学教授）・山中一郎（奈良大学助教授）のほか諸先生より格段の御高配を賜った。厚く謝意を表する。

目 次

序

| | | |
|----|--------------------------------|----|
| 1 | はしがき —— 弓張平B遺跡調査の前年度の成果と今年度の課題 | 4 |
| 2 | 1978年 弓張平B遺跡の調査経過 | 7 |
| 3 | 弓張平B遺跡の地形形成と層序 | 17 |
| 4 | 出土遺物の型式的分析 | |
| A) | 石 鐙 | 20 |
| B) | 尖頭器 | 22 |
| C) | 石 匙 | 25 |
| D) | 搔・削器 | 25 |
| E) | 彫刻刀形石器 | 36 |
| F) | 石 刃 | 37 |
| G) | ナイフ形石器 | 38 |
| 5 | ナイフ形石器表面のキズの観察 | 42 |
| 6 | 遺物の平面分布 | |
| 1) | ブロックの策定 | 45 |
| 2) | II層（西区）の各ブロック | 45 |
| 3) | II層（中央区）の各ブロック | 46 |
| 4) | III-IV層（中央区）の各ブロック | 48 |
| 7 | 弓張平B遺跡の石器文化 | 54 |
| 8 | あとがき | 58 |

図版・挿図目次

| | | |
|------|------------------------|---|
| 図版 1 | 月桂樹葉形尖頭器（西区第II b文化層出土） | 1 |
| 図版 2 | ナイフ形石器（中央区第III文化層出土） | 2 |
| 図版 3 | 中央区C L-3集疊遺構（第III文化層） | 3 |
| 図版 4 | 中央区C L-2集疊遺構（第III文化層） | 3 |

| | | |
|-----|---------------------------------|-------|
| 図1 | 弓張平B遺跡1977年第1・2次調査ブロック分布図 | 4 |
| 図2 | 西区発掘終了状態 ('78年10月) | 5 |
| 図3 | 中央区発掘終了状態 ('78年10月) | 5 |
| 図4 | 西南区発掘状態 (8月11日) | 7 |
| 図5 | 西南区発掘風景 (10月) | 7 |
| 図6 | 石鏃出土状態 (西南J-31区) | 7 |
| 図7 | 石匙・石籠出土状態 (西南I-31区) | 8 |
| 図8 | 西区発掘前状態 | 8 |
| 図9 | 搔器出土状態 (西O-21区) | 8 |
| 図10 | 尖頭器出土状態 (西R-17区) | 8 |
| 図11 | 尖頭器出土状態 (西R-17区) | 9 |
| 図12 | 尖頭器出土状態 (西R-17区) | 9 |
| 図13 | 西区発掘風景 (10月) | 9 |
| 図14 | 西区遺物出土状態 (W-4 ブロック) | 9 |
| 図15 | 弓張平B遺跡付近の地形と調査区 (山形県土木部原図を利用) | 10 |
| 図16 | 尖頭器出土状態 (西Q-16区) | 11 |
| 図17 | 石鏃出土状態 (西Q-16区) | 11 |
| 図18 | 西区3・4ブロックと擾乱土 | 11 |
| 図19 | 西区発掘終了状態 (8月) | 11 |
| 図20 | 中央区発掘前風景 | 12 |
| 図21 | 中央区発掘風景 (8月) | 12 |
| 図22 | 中央区発掘風景 (10月) | 12 |
| 図23 | 中央区遺物出土状況 (CU-3 ブロック) | 12 |
| 図24 | 搔・削器出土状態 (CU-3 ブロック) | 13 |
| 図25 | 搔器出土状態 (CU-3 ブロック、E'-23区) | 13 |
| 図26 | ナイフ形石器出土状態 (CL-2 ブロック、B'-18区) | 13 |
| 図27 | 彫刻刀出土状態 (中央C'-23区) | 13 |
| 図28 | ナイフ形石器出土状態 (CL-6 ブロック、Y-21区) | 14 |
| 図29 | 発掘にたずきわった人々 | 14 |
| 図30 | 弓張平B遺跡第1～4次調査発掘区 | 15 |
| 図31 | 弓張平B遺跡の土層柱状図 | 17 |
| 図32 | 弓張平B遺跡19グリッド列土層断面図および2層上面擾乱土平面図 | 18・19 |

| | |
|-------------------------------------|-------|
| 図33 弓張平B遺跡出土の石鎌と剝片尖頭器 | 21 |
| 図34 弓張平B遺跡出土の尖頭器（西区3・4ブロック） | 23 |
| 図35 弓張平B遺跡出土の石匙 | 25 |
| 図36 弓張平B遺跡の搔・削器（1） | 27 |
| 図37 弓張平B遺跡の搔・削器（2） | 29 |
| 図38 弓張平B遺跡の搔・削器（3） | 31 |
| 図39 弓張平B遺跡の搔器の類型別刃部角、側縁調整角累積度数図 | 33 |
| 図40 弓張平Bと角二山遺跡の搔器刃部角、搔器側縁調整角比較累積度数図 | 33 |
| 図41 弓張平Bと火箱岩洞穴出土の円弧状搔器刃部角比較累積度数図 | 33 |
| 図42 弓張平Bと火箱岩洞穴の円弧状搔器の長幅相関関係 | 33 |
| 図43 弓張平B遺跡下層出土の搔器 | 34 |
| 図44 弓張平B遺跡出土の彫刻刀形石器 | 36 |
| 図45 弓張平B遺跡出土の石刃 | 37 |
| 図46 ナイフ形石器の形態分類 | 38 |
| 図47 弓張平B遺跡出土のナイフ形石器（1） | 40 |
| 図48 弓張平B遺跡出土のナイフ形石器（2） | 41 |
| 図49 ナイフ形石器表面のキズ顕微鏡写真（1） | 43 |
| 図50 ナイフ形石器表面のキズ顕微鏡写真（2） | 44 |
| 図51 弓張平B遺跡西区W-1、W-2ブロック出土縦長剝片の接合資料 | 47 |
| 図52 西区W-1、W-2ブロックの接合縦長剝片の出土位置 | 47 |
| 図53 弓張平B遺跡西区W-3～5ブロック平面分布図 | 49 |
| 図54 弓張平B遺跡中央区C U-1～6ブロック平面分布図 | 52・53 |
| 図55 弓張平B遺跡中央区とL-1～5ブロック平面分布図 | 54・55 |
| 図56 最上川・荒川流域のナイフ形石器の編年 | 60 |
| 図57 弓張平B遺跡の石器文化の編年 | 65 |
| 表-1 弓張平B遺跡出土尖頭器の計測値 | 24 |
| 表-2 弓張平B遺跡出土搔器・削器の属性表 | 35 |
| 表-3 弓張平B遺跡出土彫刻刀形石器の計測値 | 36 |
| 表-4 ブロック別石器組成表 | 56 |

月桂樹葉形尖頭器
(西區第II b文化層出土)



図版二 ナイフ形石器（中央区第三文化層出土）



図版三 中央区C.L.-3集落遺構(第Ⅲ文化層)



図版四 中央C.L.-2集落遺構(第Ⅲ文化層)



1 はしがき——弓張平B遺跡調査の前年度の成果と今年度の課題

昭和52（1977）年に実施した弓張平B遺跡の第1・2次発掘調査で、我々はこの遺跡の性格をかなりの程度明らかにすることができた（〔第1・2次調査報告書〕）。

〈西区の成果と課題〉

遺跡の西部（西区）で、有舌尖頭器を主とするブロックを一つ完掘した。4m×6m程度の楕円形のまとまりをもっており、ブロックのほぼ中央には台石がある。両面調整の木葉形尖頭器、小瀬ガ沢様式の有舌尖頭器、有肩尖頭器、搔器、削器、ノッチ（抉入状搔器）などが組成されている。土器および細石刃の類はない。もっとも近いものは、新潟県中里村中林遺跡の石器文化である。

西区のこのブロック（W-1ブロック）は、はじて各種類の石器製作の最終工程の場としての様相をつよく示す。とともに、調理具・加工具とみられる石器群は完成品が多く、それらがこの場所で使用された公算が大きい。したがって、発掘区の拡張によってこの有舌尖頭器群と関連するブロックを探せうこと、そしてベースキャンプの性格をもったユニットの全貌をとらえられる可能性が予測された。

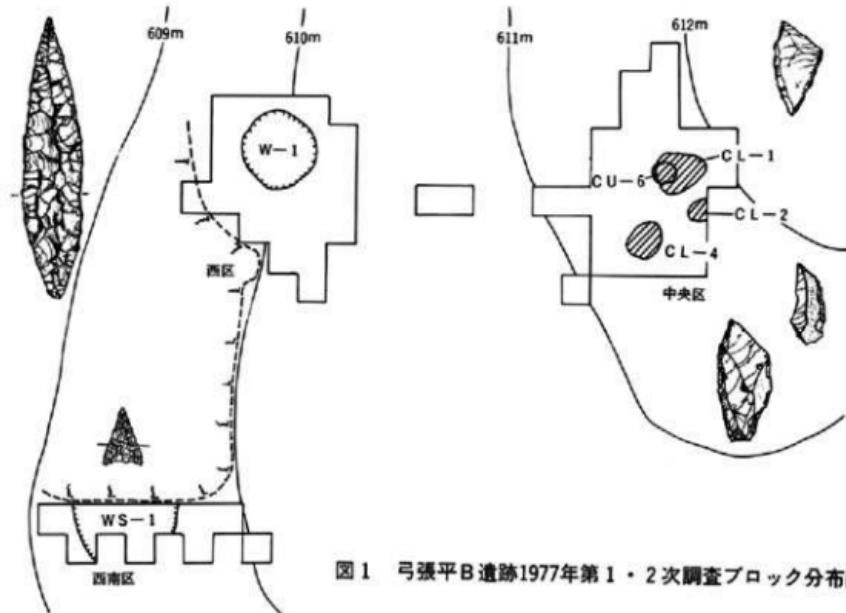


図1 弓張平B遺跡1977年第1・2次調査ブロック分布図



図2 西区発掘終了状態 ('78年10月)



図3 中央区発掘終了状態 ('78年10月)

〈中央区の成果と課題〉

遺跡中央部（中央区）では、西区の有舌尖頭器群の包含層と同一とみられる層準（第2文化層）から、縦長剝片と碎片類が出土し、その下層（第3文化層）からは、黒耀石製の小型のナイフ形石器を中心とする石器群を発掘した。分布範囲の一部に、焼土、焼石、小礫群などの生活の場がとらえられたが、ブロックを策定するまでにいたらなかった。遺物の種類も、ナイフ形石器、搔器、剝片、石核と少ない。したがって、小礫群を含むユニットの構造を明らかにするために中央区を面として拡張発掘するとともに、上層、下層の各石器文化の層位的関係を把握するために、西区と中央区とを連結し、その層位の対比を適確に行なう、より綿密な追跡の必要性を痛感した。

とくに中央区の第3文化層の代表的なナイフ形石器は、大まかには南関東の立川ローム層中、第IV層中～上位の石器文化に対比されそうに考えた。従来東北地方で明らかにされてきた石刃技法に基づく、杉久保型・金谷原型・東山型等々のナイフ形石器などに比較してみると、かなり異質な石器であるという印象を受ける。あらためて関東・中部地方の石器文化との関連が論議されなければなるまい。その解明は、後期旧石器時代の文化圏、生活様式論に一石を投じることとなろう。

〈遺跡の範囲についての課題〉

西区の南に、多数の碎片が散布する地点（西南区）がある。遺構として炉とみられる石組みがある。住居跡の一部となるか、まだその全体像はつかめていない。遺物には、石籠と若干の羽状繩文土器片がある。繩文時代前期初頭に位置づけられる。この時期の遺物は、弓張平B遺跡の全面に散漫に発見される。

中央区の南にも遺物の包含層がある（南区）が、ほとんど分っていない。試掘溝から、搔器1点と、剝片・碎片が出土している。搔器は有舌尖頭器の時期かあるいはその直後に

らいの型式である。弓張平B遺跡のいずれかの部分に、中林型の有舌尖頭器群に後続する、土器を伴なう有舌尖頭器文化のユニットの存在が予測されてきた(『第1・2次調査報告書』11頁)。その追跡も興味ある課題である。

中央区の北側(北区)には、テスト・ピットを数カ所設けたが、遺構・遺物はなかった。弓張平B遺跡の範囲は、台地の突端である南側の方へ大きく拡がるものと予測されるが、まだその全貌を把握していない。我々が、前年度に発掘できた面積は、わずかに400m²たらずであった。これは弓張平B遺跡の想定面積18,000m²の約50分の1にすぎない。調査ははじまつばかりである。

以上の諸点を主な課題として、一つ一つを解明することに力点をおくこととした。とくに有舌尖頭器文化とナイフ型石器文化のそれぞれのユニットの構造と、その編年的位置づけに主力をあげることとし、調査の状況により適時問題に対応する形で進めることにした。

(加藤 総・宇野修平・会田容弘)

2 1978年度弓張平B遺跡の調査経過

- (注) * 西区関係
☆ 中央区関係
◎ 西南区関係
△ 東区関係



図4 西南区発掘状態（8月11日）



図5 西南区発掘風景（10月）



図6 石器出土状態（西南J-31区）

7月28日（金） 晴れ時々くもり

現地へ器材運搬、テント・仮小屋設営、調査予定地の草を刈り、前年の調査の際に打った杭の確認をおこなう。

7月29日（土） 晴れのちくもり一時雷雨

☆ Y-C'-18、Y-17~21区のいわゆるベルトを耕作土から剥ぐ。併行してX-18・20・21、W-18・20、C'-19~21区を掘る。

△ 遺跡の層序確認と中央区の範囲確認のため、I'・J'-19、P'-19区の表土を剥ぐ。この遺跡東方部を東区とよぶ。主要な出土遺物（以下、単に遺物と用いる。）はナイフ形石器の基部。

7月30日（日） 晴れのち雷雨

* 前年度発掘区の確認をおこない、N-16~18区のベルトを精査する。併行して層序確認のためQ・R・U・V-19区の表土を剥ぐ。

☆ C'-19~21区の精査をおこないII層中面まで達する。あわせてW-21区を拡張する。

△ 昨日出土したナイフ形石器基部に関連する遺物の確認のため、H'・L'-19区を掘り、H'-19区はII層上面から約15cm、L'-19区は同じく約10cmまで下げる。遺物は石鏃と片面調整剝片（表土）。

雷雨のため作業は14:30で打ち切る。

7月31日（月） くもり時々晴れ

* N-17・18区を中心に精査を行なう。午後からは併行し尖頭器製作工程に関する別のブロックをさがすためP-21・22区の表土を

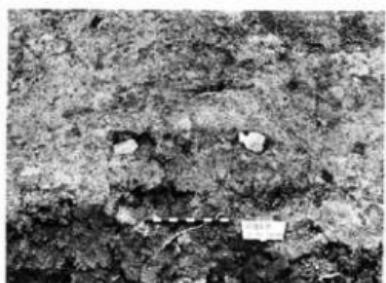


図7 石匙・石刀出土状態（西南I-31区）



図8 西区発掘前状態



図9 挖器出土状態（西O-21区）

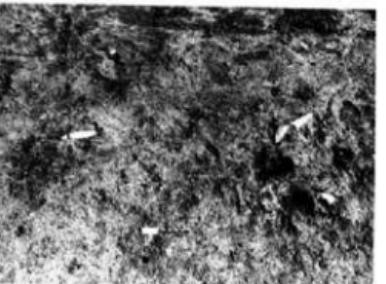


図10 尖頭器出土状態（西R-17区）

剥ぐ。遺物はハンマー・ストーン（？、表土）。

☆ C'-19~21区の精査をおこないII層下面まで達する。併行してX-18、Y-18~21区を精査する。午後からは、拡張区の設定をおこなう。遺物はナイフ形石器（II層）。

△ 遺物の出土の有無の確認のためH'-19区を掘り下げる。西側にIII層を切り込む落ち込みがみられた。われわれがローム・マウンドとよぶものようである。遺物は石匙（落ち込み）。

8月1日（火） 晴れ時々くもり

* 昨年検出したブロックの下限をさぐるために、台石を中心に精査を行なう。併行してN-22区を拡張し、P-21、O・P-22区とともに約10cm掘り下げる。またQ～T-19区の北側半分をIII層まで掘り下げ、U・V-19区をも精査する。U-19区に焼藻群が発見された。

☆ W・X-18~21区の精査をおこなう。特記事項なし。

△ H'~J'-19区の掘り下げをおこなう。I'・J'-19区にかかる落ち込みを検出。遺物は石刃2点（II層）と搔器（落ち込み中）がJ'-19区より出土。

なお、別動隊がM・A'・P'-19区を深掘りし、層の対比をおこなう。

8月2日（水） 晴れ

* N-21・22、O-20~22、P-20~22区の精査をおこない約5cm掘り下げる。遺物はO-21区より搔器（II層）。併行してU・V-19区の精査も行なう。特記事項なし。

☆ II層とIII層の界面の凹凸を平面でとらえ

るためX～Z-19～21区の面整理・線引き・実測をおこなう。併せてC'～20・21区の精査をおこなう。遺物はナイフ形石器（III層）。

△ H'～19区で検出されたローム・マウンドの輪郭をだすため、E'～G'～19区を掘りIII層まで下げる。遺物はE'～19区より石錐（I層）。

8月3日（木） 晴れ

* 台石を中心に精査をおこなう。午後からはN・O-23区の表土を剥ぎ遺物出土の有無を調べる。併せて層序確認のためP-19区を深掘りする。

☆ 前日と同様区およびC'～19区を掘り、未確認のブロックの検出をはかる。遺物はC'～19区より石刃、X-19区より石核・ナイフ形石器が共にIII層から出土する。

△ ローム・マウンドの平面形を明らかにするためK'・L'～19区を掘り下げる。結果、確認することができる。

8月4日（金） 晴れ時々小雨

* ブロック範囲確認のためO-25区を精査する。特記事項なし。

☆ W-19・20、C'～19～21区の精査をおこなう。午後から頁岩のブロックの存否を確かめるためD'～19～21区の表土を剥ぎ、特にD'～21区の精査をおこなう。

○ 西南区の層序確認のためI-31区南側を深掘りする。午後からはI-30区を1m×1mに区切り精査を行なう。特記事項なし。

△ 遺物包含層を確認するためE'・F'～19区をIV層まで掘り下げる。併せてJ'～19区出土遺物のひろがりをみるためにJ'～20区を掘る。

8月5日（土） 晴れ



図11 尖頭器出土状態（西R-17区）



図12 尖頭器出土状態（西R-17区）



図13 西区発掘風景（10月）



図14 西区遺物出土状態（W-4ブロック）

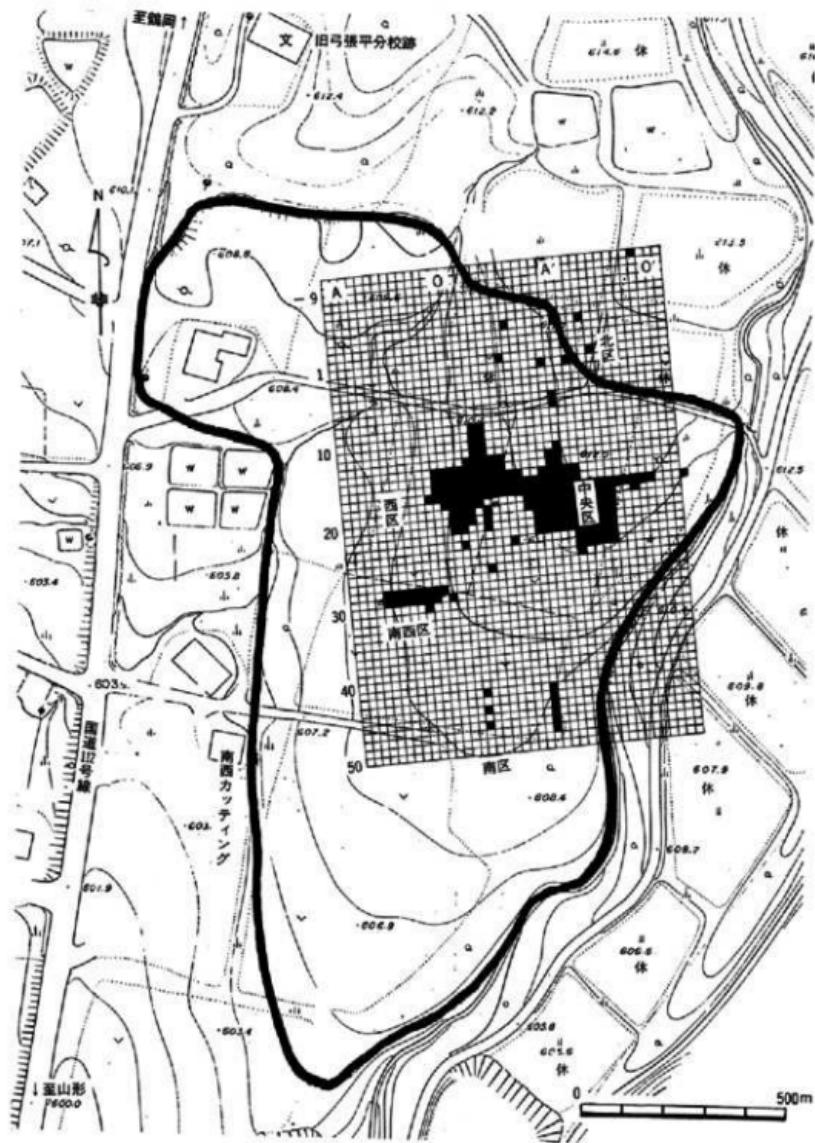


図15 弓張平B遺跡付近の地形と調査区（山形県土木部原図を利用）

☆ 明日からの拡張区のための上げ土の移動をおこなう。

◎ I-30区を精査。

P~V-19区の北壁セクション線引き、実測をおこない本遺跡の層序を確認する。

8月6日(日) 晴れ

☆ 遺物の広がりを確認のためC'-22~26、D'-22、E'-21・22区の表土を剥ぐ。併行してW・X-19区の精査をおこなう。

◎ I-30区の遺物がでなくなるまで掘る。

8月7日(月) 晴れ

調査参加者に疲労の色がみえたため作業を休む。

8月8日(火) くもりのち雨

☆ 一昨日表土を剥いだ区の精査をおこなう。遺物はC'-23区より頁岩製彫器(III層)。

◎ 遺物出土層位の確認のためH-30~33区東側に50cm幅のトレンチを設ける。午後にはI-31区の南壁セクションを実測する。

8月9日(水) 雨のち晴れ

* M~O-18区のベルトを精査し、併行してQ-17・18・20、R-21~23区の表土を剥ぐ。特記事項なし。

☆ ブロックの範囲確認のためZ-18、A'~C'-17・18区の精査をおこなう。遺物はB'-18区より頁岩製ナイフ形石器(III層)

◎ G-30区を掘り下げる、遺物出土層位が明らかになる。

8月10日(木) 晴れのちくもり

* Q-17・18・20区をII層中面まで掘り下げ、併せてR-17・18区を新設する。遺物はR-17区より木葉形尖頭器2点(表土)、R

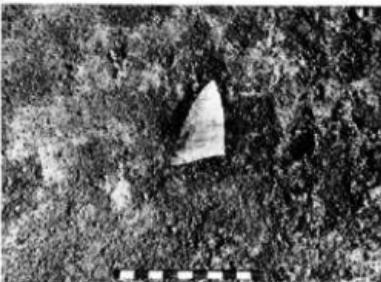


図16 尖頭器出土状態(西Q-16区)

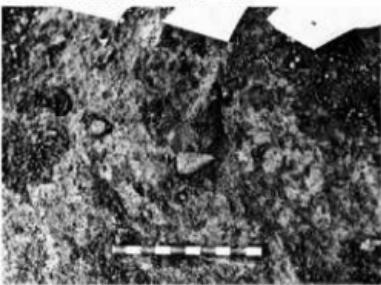


図17 石錐出土状態(西Q-16区)



図18 西区3・4ブロックと擾乱土



図19 西区発掘終了状態(8月)



図20 中央区発掘前風景



図21 中央区発掘風景（8月）



図22 中央区発掘風景（10月）



図23 中央区遺物出土状況（C U-3 ブロック）

—18区より彫器（表土）。

☆ 発掘区の東・西・南・北各壁のセクション図を実測する。

8月11日（金） 晴れ

全景写真を撮り、器材を撤収し、第3次調査の発掘日程をすべて終了する。

9月25日（月） 晴れ

器材運搬。テント、仮小屋設営。

今次調査は、本遺跡北方約300mに位置する弓張平C遺跡と併せての調査である。

9月27日（水） 晴れ

* 新たにO～R-16、S-16～18区を設定し、表土を剥ぐ。遺物はR-16区より土器。

◎ E-30・31、F・H～J-31区を1m×1mに区切り表土層から掘る。遺物はH-31区より石鎌（表土）。

9月28日（木） 晴れ時々くもり

* P～R-16、S-16～18区のIII層を掘り下げる。併せてR-21・22区のII層R-21・22区のII層以下をスコップで掘りで30cmほど下げる。遺物はQ・R-16区より大型剝片多数。

◎ F～J-30、G～J-31区をII層中面まで掘り下げる、新たにJ-32区を設定し同面まで掘り下げる。遺物はI-31区より石匙。

9月29日（金） 小雨

* 昨日、Q・R-16区より出土した大型剝片の広がりを確認するためP～S-15、T-15～18区を新設し表土を剥ぐ。午後は雨のため作業を中止とする。

9月30日（土） 晴れ

* P~T-15~18、U・V-17・18区を精査しII層中面まで達する。遺物はQ・R-16区より尖頭器破損品、石鏃(共にII層)・土器(II層に確認された落ち込み中)。

10月1日(日) 晴れ

* Q・R-13・14区の表土を剥ぐ。その後同区を精査し、II層中面まで達する。併せてU・V-17・18区の精査をもおこなう。Q・R-13・14区北側にブロックを検出する。

10月2日(月) 晴れ

* 昨日検出したブロックの広がりを確認するためQ・R-11・12区を新設し、Q・R-13・14区と共にIII層下面まで掘り下げる。遺物はR-12区東側より土器3点(II層)。併行してQ-16~18、R-17・18区を5cmほど掘る。Q・R-17・18区にローム・マウンドを確認する。

☆ F'-20~21区を新設し表土を剥ぐ。特記事項なし。

10月3日(火) 晴れ

* P~R-17~18区にかかるローム・マウンドを実測する。これで西区はほぼ終了する。☆ F'-20~22、D'-F'-23区を新設しII層上面を掘り抜く。またW~Z-19区を5cmほど掘り下げる。その後A'-18・21区を同様に5cmほど掘り下げる。遺物はD'・E'-23区から円形搔器4点、搔器1点、削器1点(すべてII層)、W-19区より黒耀石製ナイフ形石器(III層)。

10月4日(水) 晴れのち雨

* 各ブロックの写真撮影。

☆ Y~A'-21区をIV層まで掘り下げ、またX-22、E'・F'-23区の掘り下げもおこなう。



図24 挖・削器出土状態(CU-3ブロック)

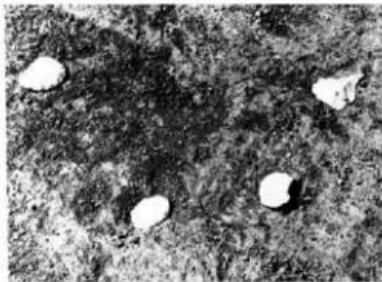


図25 挖器出土状態(CU-3ブロック、E'-23区)



図26 ナイフ形石器出土状態(CL-2ブロック、B-18区)



図27 彫刻刀出土状態(中央C-23区)

併行してD'～F'－24、G'－19～24区を新設し表土を剥ぎII層上面まで達する。遺物はX－22区より円形搔器(表土)、E'－24区より石鎌、F'－24区より搔器2点、抉入搔器(以上表土)。

10月5日(木) 晴れ

☆ D'～G'－25・26区を新設しII層上面まで掘り、のち精査を行なう。併行してG'－20～23区を精査する。遺物はG'－20区より石刃、G'－21区より石刃を素材とした削器、D'－24区より土器2点(以上II層)。また円形搔器を主要とするブロックからは多量のチップが出土している。

10月6日(金) 晴れのちくもり

☆ W・X－19～21、Y・Z－20区をIV層上面まで掘り下げ遺物包含層の下限を確認する。併行してD'・E'－20～22区をIII層まで掘り下げ、またD'～G'－23～26区のII層を精査する。

10月7日(土) 雨時々くもり

☆ E'・F'－25・26、G'－25区のII層を5cm程掘り下げる。併行してX－23・24、Y～B'－22～24区の表土を剥ぐ。特記事項なし。

10月8日(日) 晴れ

☆ D'～F'－25・26、G'－22～26区で出土した遺物の点とりを行ない、午後はZ～B'－22～24区のII層を5cm程掘り下げる。遺物はZ'－22石窓(表土下部)。

◎ 発掘面のレベルを測る。

10月9日(月) 晴れ

☆ X・Y－22～24区のII層を5cm程掘り下げる。併行してD'～G'－20～26区の出土遺物の点をとる。午後からはA'・B'－22区を掘り下げC'列と同レベルまで達する。

10月10日(火) 雨時々くもり

☆ X～B'－22～24区をブロック探査のため精査する。その後、III層を掘り下げる。遺物はY－23区よりナイフ形石器(III層上面)。併行して中央区東部のローム・マウンドを四分割して掘る。E'－20区の部分より尖頭器基部出土。またE'－22～24区を精査し、D'・E'－23・24区にかかる疊の抜き取り痕群の実測をおこなう。

10月11日(水) くもり時々小雨

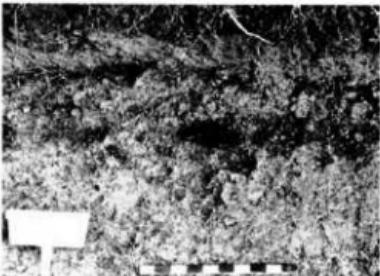


図28 ナイフ形石器出土状態 (CL-6ブロック Y-21区)



図29 発掘にたずさわった人々

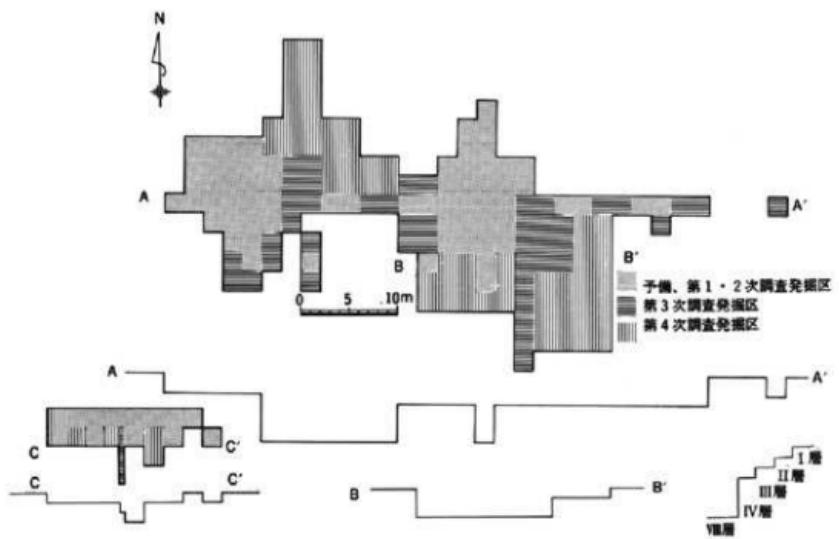


図30 弓張平B遺跡第1～4次調査発掘区

☆ ローム・マウンド、F'・G'—20～2区は昨日の作業を継続。またW～C'—18区を5cm程掘り下げる。遺物はX—18区よりナイフ形石器（III層）。

10月12日（木）雨

雨天により作業不可能のため器材の整理をおこなう。

10月13日（金）雨時々あられ

☆ 今まで出土した遺物の点をとる。本日が調査予定期間の最終日であるため器材の撤収をおこなう。しかし、若干の遺物のとりあげ、礫群のラテックス使用による石膏型復元・礫群のとりあげ・発掘区の全面精査・全景写真などの作業はまだ終了していない。

第3・4次調査の発掘面積はつぎの通りである。またカッコ内は第1・2次調査の際の発掘面積をも加えたものである。

西区 168m² (292m²)

中央区 252m² (380m²)

西南区 26m² (70m²)

南区 (36m²)

北区 (40m²)

計 446m² (818m²)

これは本遺跡の想定面積18,000m²の約2.5%（約4.5%）である。

（荒井 格・青木敏雄）

〈付記〉

最終的な発掘区の全面精査と遺物の取り上げ、礫群のラテックスの使用による石膏模型復元等々の作業は、11月3日までの期間に補足調査をおこない終了した。 （加藤 稔）

3 弓張平台地の地形形成とB遺跡の層序（補）

弓張平は、月山火山帯のひとつである姥ヶ岳火山の起源とみられる熔岩流で形成された、熔岩台地の末端部ちかくに位置する（『1・2次報告』図8）。弓張平遺跡群は、この熔岩台地を広くおおう火山泥流上に立地している（『分布調査報告書』(5)、図11）。

月山火山の泥流の流出年代はまだ算出されていない。月山北西斜面に多数の黒曜石噴出地点がみられる。噴出年代は西村進(1974)によって、350,000ys. B. P. という値が、フィッショング・トラック法で算出されている。この年代値は、月山中央火山などの噴出年代よりも、かなり古い値であろうと考えられている（今田・柴橋・富沢 1975）。それは、黒曜石の噴出部分が泥流でおおわれていることで確認されている。

遺跡付近にみられる地層の最上部は、気成の火山灰土ではなしに、一次堆積の泥流が多量に水をふくんで流出再堆積した二次泥流の可能性もある。

弓張平B遺跡の第I層は耕作土で、本来の第I層の腐植土と本来は第II層上部の土壤とが混在している。未開墾部分の腐植土はひじょうに薄い。第II～III層は粘土・シルトからなるローム層である。ごく稀に小指の頭大ぐらいの小礫をふくむ。この第II～III層を『1・

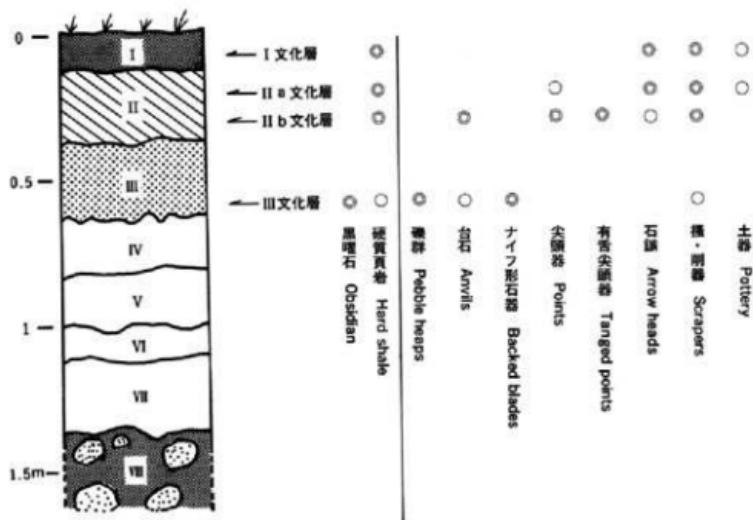


図31 弓張平B遺跡の土層柱状図

2次報告」(1978)中に、降下火山灰土と記載したが、判断の基準があいまいであったこと、また降下火山灰であることの証拠が今なお見つかっていないことから、その判断を留保せざるを得ない。

第IV～VII層は、礫や大粒の砂をあまりふくまない、シルト・粘土からなるローム層である。二次泥流の上澄み部分で、風化の度合で層位が区分できるよう見えるのか、降下火山灰が順次堆積したものなのか、今のところ判断はついてない。なお、前の報告(弓張平遺跡、1977)の中でVII層としたものは再考の結果、風化礫の疑いが強く、除外した。前報告のVIII・IX層は本報告のVII・VIII層に相当する。

第VIII層は、風化した安山岩礫を多量にふくむ。二次泥流と考えられる。

層位と出土遺物の関係はつぎのように整理される(図31)。

第I層：縄文時代前期初頭の土器片・石鎌・石匙など。また、本来は第II層上位にふくまれていたとみられる遺物も出土する。

第II層上部：石鎌・剥片尖頭器・搔器・削器が出土する。縄文時代の早期初頭ないし中石器時代の遺物と考えられる。

第II層中部～下部：土器をもたない有舌尖頭器、やや大き目の柳葉形尖頭器が出土する。

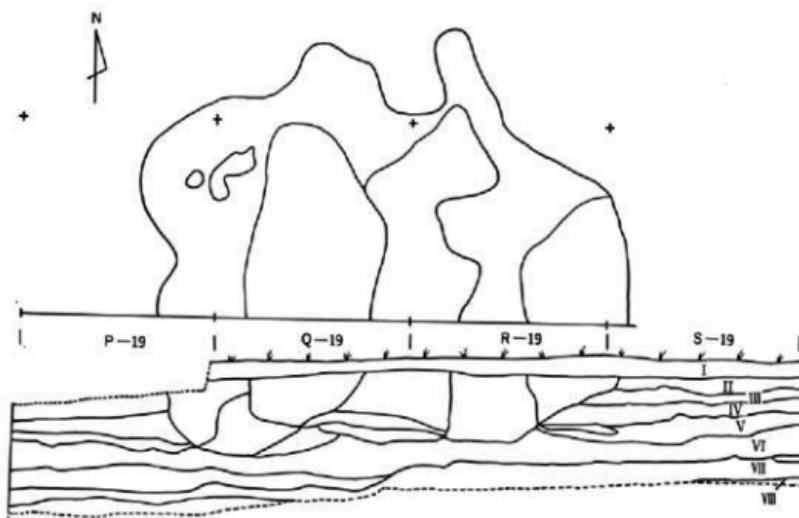


図32 弓張平B遺跡19グリッド列土層断面図および2層上面擾乱土平面図

有舌尖頭器と共に存するのか、それ以前の遺物のかなお検討を要する。

第II層には以上2枚の文化層があると考えられるが、層位的に割然と区別されるわけではなく、発掘作業時の経験によるものである。

第I～II層出土の石器の素材の大半は硬質頁岩で、一部珪質頁岩を用いている。

第III層：ナイフ形石器が発見された。素材の大半は黒曜石である。黒曜石の石器・剝片が多数上層に移動しており、ナイフ形石器製作者の生活面の判断に苦んだが第III層下部で砾群が集中して確認されたことから、ナイフ形石器の一次的な包含層は第III層下部であるとの結果を得た。

本遺跡の調査中、われわれを悩ましたものがある。通常われわれがローム・マウンド (loam mound) と呼んでいるものである。不規則な黒ボク土の落ち込みとローム土の浮上貫入という層位の擾乱を呈する。黒ボク土が落ち込む面は第II層上面で、深さは一定していない。剝片などの人工物を多量に巻きこんだばあいもある。包含されている遺物に、縄文時代前期初頭とみられる石匙がある。したがって、弓張平B遺跡でのローム・マウンドの形成時期は沖積世（縄文時代の及びそれ以降）と考えられる（図32）。

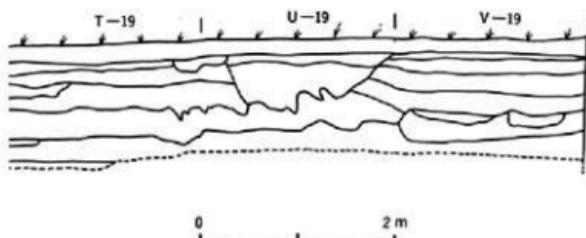
ローム・マウンド形成の原因として、沖積世気候下における凍結融解による土壤擾乱 (solifluction) の影響を予想している。しかし、開墾時の抜根による人為的擾乱やいわゆる風倒木による擾乱などの意見もある。なお検討を要する課題である。（青木敏雄）

（文 献）

西村 進（1975）「主として東北地方の Fission - Track Age」『国内地球内部ダイナミックス計画』

今田 正・柴崎敬一・富沢 尚（1975）「月山火山」『出羽三山・糸山』 1-14頁

『地学辞典』（1977）平凡社



4 出土遺物の型式的分析

この報告では、第4次調査までに発見された弓張平B遺跡の西区、および中央区の遺構と遺物群のまとまり（ブロッカーblock）を紹介するのに主眼をおこうと考える。説明の都合上、はじめに各ブロックで発見された石器群をその型式ごとに叙述しておく。

A 石 錐

弓張平B遺跡発見の石錐は、すべて無柄の二等辺三角形錐である。第1・2次調査 3点（『1・2次報告書』図33-1～3）、第3・4次調査 5点（図33）の計8点がある。第1・2次調査出土品（うち2点は表面採集品）は縄文時代早朝～前期初頭と想定している。

第3・4次調査時の出土品5点を、その平面形から3類に細別したい。石材は、やや小型の1点（図33-4）が赤みをおびた珪質頁岩製品である外は、硬質頁岩製品である。いずれも鋭く先端をつくり出している無柄の石錐である。

第1類（図33-1・2）

基部のつくりが単純に直線をなす石錐である。他の石錐に比べて、先端がより凸状を呈しながら、両側辺がわずかに外彎する。両面とも横に平行な調整剝離が加えられている。No.1は西（Q-16）区出土で、第5類の尖頭器（図34-3）と共存した。No.2は中央（D'-23）区出土で両面とも錐身の中央部に、一次剝離の平坦面を残している。山形県高畠町火箱岩洞穴の第2類石錐（柏倉・加藤 1967）に共通する。本類の石錐は、この地方の初現期のものである可能性がある。中石器時代の石錐とみられる。

第2類（図33-3・4）

基部にわずかに凹状をなす類である。No.4は本遺跡出土の石錐中でもっとも小さい。この石錐は西南（H-31）区出土で、少量の石匙や石籠を共伴している。一方、No.3は中央（E'-25）区出土で、多量の搔・削器を共伴している。

こうした形態の石錐は、火箱岩以降、山形県地方の縄文時代前期までもっともよく見られる類である（大石田町庚申町遺跡一中島 1976、東根市小林遺跡・其調査団 1975）。中石器時代から縄文時代前半と、かなりの幅がある。層位的に出土した新潟県上川村室谷洞穴の資料（中村 1964）に対比すると、その第3～5層にあたろうか。

第3類（図33-5）

基部に明瞭なカエリをもつ（脚部をもつ）ものを細別した。5点の石錐中もっとも調整が粗雑である。ただし基部は、細かい調整がみられる。No.5は、本遺跡出土の石錐中でもっとも

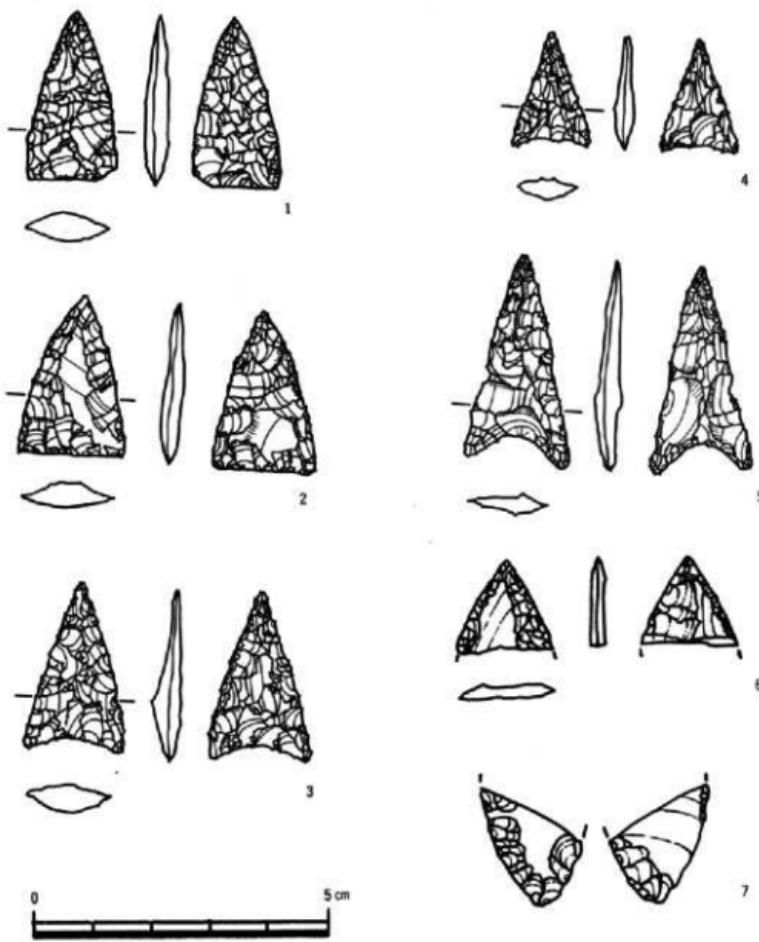


図33 弓張平B遺跡出土の石鎌と剣片尖頭器
1~5: 石鎌 6・7: 剣片尖頭器

とも大きい。この形態の石鎌も縄文時代前半期にみられるもので、山形県地方では縄文時代中期以降は目立って少なくなる（鶴岡市岡山遺跡—『其調査報告』 1972, 遊佐町神矢田遺跡—佐藤・佐藤 1972）など。

なお、第1・2次調査時の石鎌3点は、第2類に含めてよいかと考える。（及川智子）

(文 献)

- 柏倉亮吉・加藤 稔 (1967) 「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』51-65頁
- 中嶋寛 (1976) 「大石田町庚申町遺跡について」『山大史学』5
- 小林遺跡調査団 (1975) 「小林遺跡—縄文前期遺跡と平安時代集落跡—」
- 中村孝三郎 (1964) 「繩文早期室谷洞窟」『長岡市立科学博物館研究調査報告』6, 1-49頁
- 佐藤禎宏・佐藤慎雄 (1972) 「神矢田遺跡—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—」
- 柏倉亮吉他 (1972) 「山形県鶴岡市岡山遺跡調査報告」

B 尖頭器

弓張平B遺跡出土の尖頭器は、表面採集品が3点(『1・2次報告』図11-2・3・4)、第1・2次調査で22点(前掲 図35-36)、第3・4次調査で5点(図33・34)出土している。有舌尖頭器、有肩尖頭器、木葉形尖頭器に大別できる。

有舌尖頭器は、基部に舌状突出部もしくは小身(コミ)・茎(ナカゴ)をもつ尖頭器である。有肩尖頭器は、基部の一側辺に意図的にえぐりをいれ、肩をつくり出した形態をとる。それ以外のものを一括して木葉形尖頭器とする。

有舌尖頭器

第3・4次調査時の出土はない。

有肩尖頭器

第3・4次調査時の出土はない。

木葉形尖頭器

第1・2次調査出土の木葉形尖頭器を3類に細別した。第3・4次調査で、第3類の尖頭器の他に、上記細別にふくまれない類が出土したので、これを第4・5・6類とし、さらに3類を追加し、計6類としたい。

第3類(図34-2)

基部が平坦にちかく、わずかに凸状をなす。最大長13cm程度の大きさである。他の2点に比してやや細身であり、背稜が盛り上った部厚い感じを受ける。

第4類(図34-1)

弓張平B遺跡出土の尖頭器のうちでもっとも大型の類である。先端部を欠くが、長さは16cmになろう。基部も尖り、両側辺はやや外彎する。最大幅は身部の中央よりやや基部に寄る。両面ともに心にくい精巧な押圧剝離がみられる。

長野県上伊那郡神子柴遺跡の大型柳葉形尖頭器に類する(藤沢・林 1961 図4-1など)。

第5類 (図34-3)

弓張平B遺跡出土の尖頭器のうちでは大型の類である。基部先端が尖り、身部の中央部に浅いえぐりを有する。えぐりから尖頭部にかけては外彫するらしい。両面ともに押圧剥離で整形されており、上半部を欠く。最大長は15cmを越すであろう。

第6類 (図33-6・7)

本遺跡出土の尖頭器のうちではもっとも小型の尖頭器である。やや彎曲した、2~3mm程度のきわめて薄い小剥片を素材とし、先端は鋭く、基部はにくく尖らしてある。両面に一次剥離面を大きく残し、両縁を細かい剥離で整形している。表面採集品 (『1・2次報告書』図11-2) も同類かと見ている。

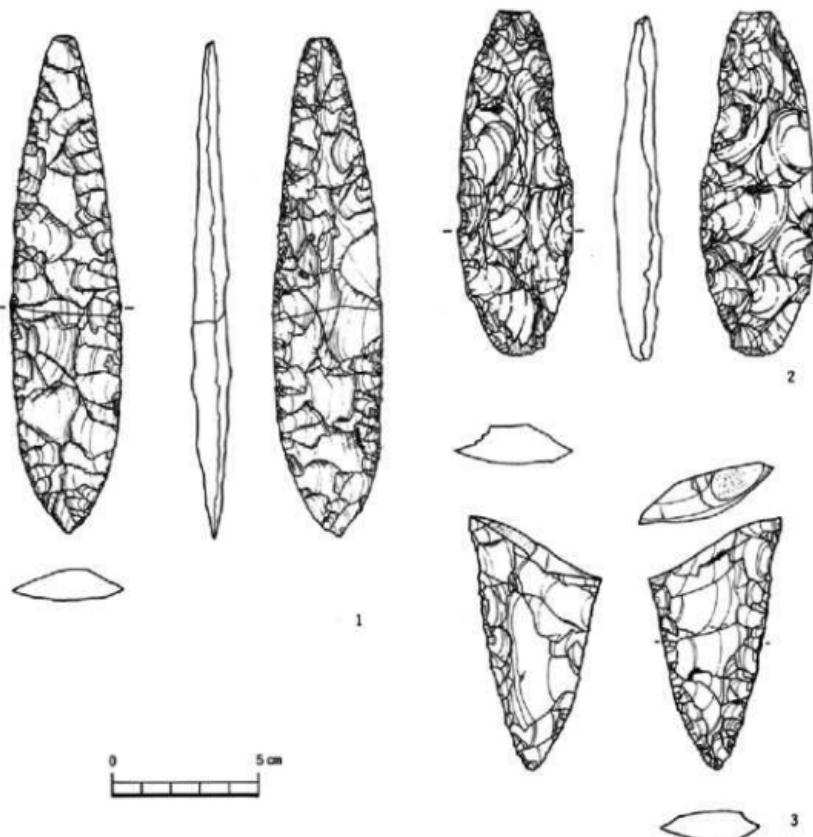


図34 弓張平B遺跡出土の尖頭器 (西区3・4ブロック)

本類の尖頭器は中央区のC U-2~3ブロックにちかく存在した。このブロックは後に述べる(50頁参照)ように、搔器類を多数ふくんでいる。

宮城県岩出山町座散乱木遺跡に類似する尖頭器がある(石器文化談話会 1978 図14-13 a~c)。弓張平B西区の有舌尖頭器群よりも、最低限一段階新しい時期(土器出現以後?)の尖頭器の一つと私考する。

(矢口広道)

(文 献)

藤沢宗平・林 茂樹(1961)「神子柴遺跡第1次発掘調査概況」『古代学』IX-3

石器文化談話会(1978)『座散乱木遺跡発掘調査報告書』

表-1 弓張平B遺跡出土尖頭器の計測値

| 番号 | 遺物番号 | ブロック名 | 型式 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 素材 | 挿図No |
|-----|----------|-------|----------------|------------------|-----------------|-----------------|------|----|---------------|
| 1 | O-17-3 | W-1 | T ₁ | 93 | 21 | 6 | 11.1 | | 1・2次 35-1 |
| 2 | O-18-7 | W-1 | T ₁ | 60 ⁺ | 15 | 6 | 5.9 | | 1・2次 35-2 |
| 3 | M-17-5 | W-1 | T ₁ | 46 | 16 | 6 | 3.1 | | 1・2次 35-4 |
| 4 | N-18-30 | W-1 | T ₁ | 48 | 21 | 6 | 4.7 | | 1・2次 35-5 |
| 5 | N-17-22 | W-1 | T ₂ | 77 | 28 | 9 | 15.3 | | 1・2次 35-3 |
| 6 | N-18-41 | W-1 | T ₃ | 75 | 19 | 6 | 10.0 | | 1・2次 35-6 |
| 7 | O-17-4 | W-1 | T ₃ | 92 | 22 | 8 | 19.3 | | 1・2次 35-7 |
| 8 | M-17-12 | W-1 | T ₄ | 98 | 13 | 6 | 8.4 | | 1・2次 35-8 |
| 9 | N-18-52 | W-1 | T ₄ | 86 | 15 | 6 | 8.2 | | 1・2次 35-9 |
| ☆10 | Q-16-17 | W-4 | L ₅ | 85 ⁺ | 46 ⁺ | 14 ⁺ | 37.6 | | 34-3 |
| 11 | N-18-31 | W-1 | S ₁ | 73 | 28 | 8 | 15.0 | | 1・2次 35-10 |
| 12 | N-17-20 | W-1 | L ₁ | 99 | 30 | 8 | 13.2 | | 1・2次 36-11 |
| 13 | N-18-58 | W-1 | L ₁ | 76 | 22 | 7 | 14.0 | | 1・2次 36-12 |
| 14 | O-19RQ2 | W-1 | L ₂ | 110 | 41 | 14 | 47.8 | | 1・2次 36-13 |
| 15 | N-18-31 | W-1 | L ₃ | 124 | 43 | 12 | 62.7 | | 1・2次 36-14 |
| 16 | N-19-14 | W-1 | L ₃ | 134 | 44 | 14 | 76.3 | | 1・2次 36-15 |
| ☆17 | R-17-2 | W-3 | L ₃ | 117 ⁺ | 40 | 13 | 59.3 | | 34-2 |
| ☆18 | R-17-3 | W-3 | L ₄ | 150 ⁺ | 37 | 11 | 63.5 | | 34-1 |
| ☆19 | D'-20-60 | C V-2 | L ₄ | 16 ⁺ | 16 ⁺ | 2 ⁺ | 0.5 | 剥片 | 33-6 |
| ☆20 | F'-24-83 | C U-3 | L ₄ | 20 ⁺ | 16 ⁺ | 2 ⁺ | 0.6 | 剥片 | 33-7 |

C 石匙

弓張平B遺跡出土の石匙は、表面採集品が1点（『1・2次報告』図33-4）、第3次調査で1点（図35）第4次調査で1点の計3点出土している。いずれも硬質頁岩製の縦形石匙である。

図35の石匙は縦長の剝片を素材としている。つまみの軸に対し右側刃部が平行、左側刃部は外彫し、先端が尖っている。刃部の背面のつくり出しは、外彫している左側をつまみから先端へと剝離し、つぎに直線状の右側を一度大きく連続剝離し、2回目におおのの側の刃部に念入りな調整剝離を加えた。そして最後に、腹面の外彫側とつまみ部分に細かい調整を加え仕上げている。

この形態の石匙にもっとも近いのは、朝日村越中山K遺跡上層の石匙である（加藤編1973）。他に大石田町庚申町遺跡や飯豊町小白川遺跡（山形県 1969）の例がある。いずれも室浜式並行もしくは花積下層ないしニッ木式期の縄文土器と伴っている。（加藤 稔）

文献

加藤 稔編（1973）「越中山遺跡K地点第3次調査略報」『越中山遺跡の研究・序説』山形県朝日村 56-83頁

山形県（1969）『山形県史資料編』11（考古資料）

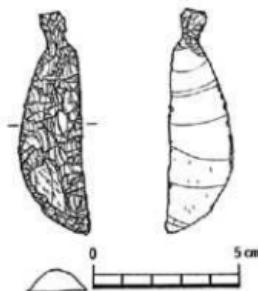


図35 弓張平B遺跡出土石匙

D 挖器・削器類

弓張平B遺跡出土の挖器・削器の類は、計36点を数える。これらの資料は①縦形挖器、②円弧状挖器、③横形挖器（削器）、④抉入状挖器、⑤突出部をもつ挖器（錐などとの複合石器）の5型式に大別でき、さらにそれぞれの形態から2段階の細別ができる。

縦形挖器

第1a類（図36-1）。

左側縁は直線的に側縁調整し、右側縁は素材のままである。刃部と側縁の調整は連続しているように見えるが、先端と側縁の調整法は異なり、後者の打角は浅くなっている。

第1b類（図36-2）。

ほぼ全周にわたって調整がみられる。右側縁の調整は刃部から連続する形で続いているが刃部よりも高い角度をもつ、それに対して、左側縁は浅い。基部の打面打瘤を背面側か

ら腹面側にむかって加撃整形している。右側縁から刃部への調整の連続は、E'-23区出土No.7 資料（図36-6）と類似している。

第1c類（図36-3）。

左側縁は節理面でほとんど調整はない。右側縁には腹面に連続して調整がある。基部にも調整が加えられている。

第1e類（図36-4）。

右側縁は折断をおこなった上で、背面から加撃で調整を加えている。

第2a類（『第1・2次報告書』図37-16）。

両側縁に連続した調整が加えられて、刃部のそれとは区別される。腹面加工で打瘤は取りのぞかれている。刃部は深い剝離が連続している。

第2b類（『第1・2次報告書』図37-18）。

表皮のついた剝片を用い、左側には連続した調整があるが、右側縁は素材をそのままの形で利用している。刃角も大分浅いようである。

第2c類（図36-6）

基部は折断され、調整はない。左側縁は素材のままで右側縁に刃部から連続して側縁調整が続いている。刃部には階段状の剝離が残っている。

第2d類（図36-5、『第1・2次発掘調査報告書』図37-17）

素材をほとんどそのままの形で刃部だけつくり出しただけのもので、側縁調整はない。刃部角は60°と搔器としては浅いもの（図37-17）や、いちじるしい再刃付けのため刃部が斜凸形をなすもの（図36-5）がある、後者は、右刃部が若干凹んでいる。

第3類（図36-7・8）

この形態の石器を縦形搔器とよぶのは問題があろう。というのは、刃部角が他の搔器よりも大分浅く、周縁加工も異なっているからである。周縁は急角度の背面加工でその断面は逆台形をなす。縄文時代の石器にちかい形態である。図33-7は、打瘤を除去して刃部としている。基部は切断され、使用痕とみられる小剝離がある。この手の石器が表面採集品にもある（『第1・2次報告書』図33-6）。前回、縄文時代の石器としたが、出土層位も勘案して、石器とは似て非なるものと考えたい。

縦形搔器の大半は、W-1ブロックとCU-3ブロックから出土した。形態分類からだけでは、それらを十分に分離することはできなかったが、製作技法を加味して考えるところの点が指摘できる。第1は、CU-3ブロックの搔器には、平行した刃部の剝離痕は見られない。全体として粗雑な刃付けをおこなっている。そして第2に、CU-3ブロックの搔器の中に、刃部と側縁の調整が連続するものが見うけられる。これはCU-3ブロック

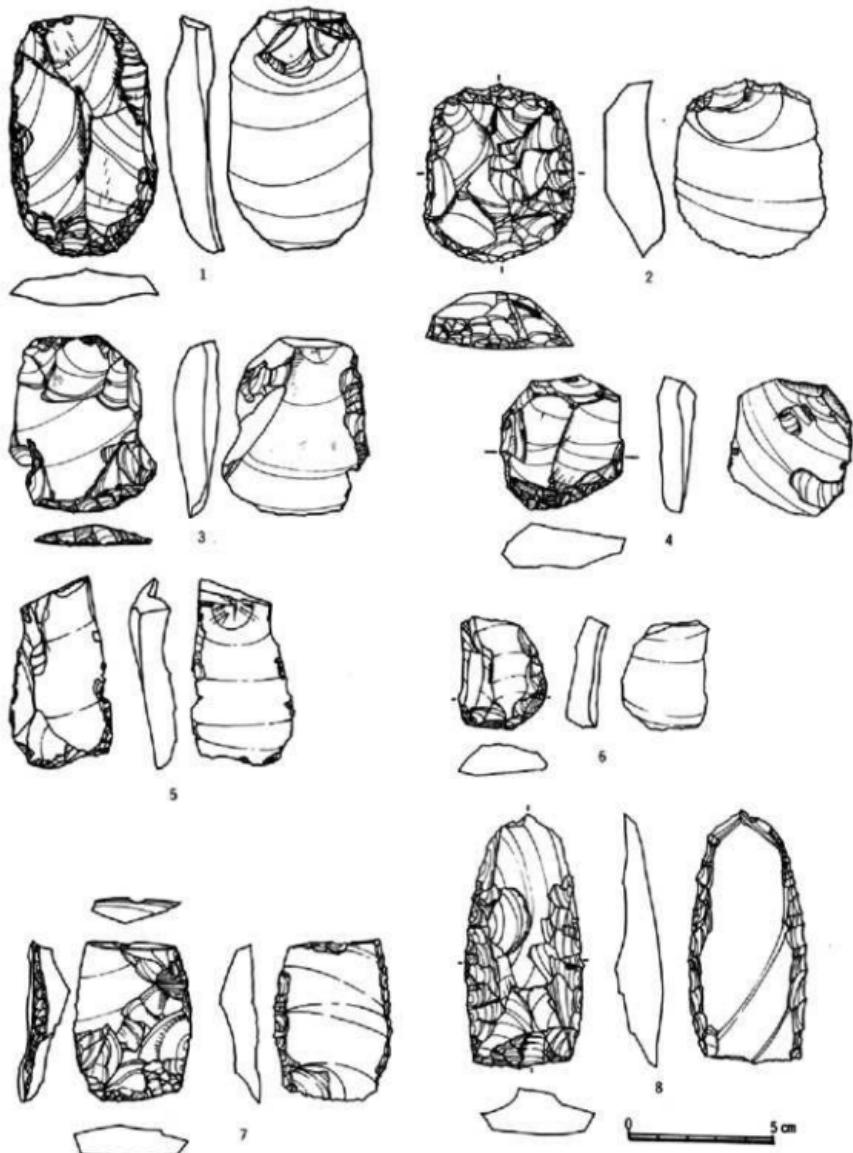


図36 弓張平B遺跡の手・削器（1）

クの特徴的な存在である円弧状搔器となんらかの関連が考えられる。

円弧状搔器（図37—14・15・16、図38—17・18・19・20・21）

円弧状という語は、円形搔器 (round scraper) とは区別し、その調整が円形にまでいたらない搔器という意味で用いた。連續した調整が全周におよんでいるものではなく、また不連續のものもある。すなわち、円弧状の周縁を作出するのに、二・三度角度や剝離の深さを変えて調整しているのが目立つ。周縁の調整打法に変化がみられるということは、ひとつには素材からの制約があろうし、異なった刃付けをおこなったとされるのである。

個々の石器について説明してゆきたい。

図37—14は、ほぼ全周にわたって調整がみられるが、右側の調整は異なっている。腹面は打瘤を除去する加工がなされている。

図37—15は、3種の調整がみられる。上半は打面を除去する剝離がある。加撃は数回おこなわれており、階段状を呈している。南区出土。

図37—16は、打面を大きく残している。右側と左側下縁との2種の調整が見られる。

図38—17は、背面に大きく節理面を残している。打面は上方にあったが、節理面でとばされている。左側刃部は再刃付けとみられる。腹面にも弧状の連続調整がみられる。

図38—18は、剥片の先端に弧状の連続した調整がみられるが複雑な加撃で、打面などが除去されているため扁平な形態をとっている。腹面にも若干の調整がみられる。

図38—19は、打面がほぼそのまま残っている例である。素材はもともと横長だったろう。刃部の調整は2種に分けられる。

図38—20は、腹面だけに調整が加えられている。調整は2種に分けられる。打面は原礫面を使い、平坦打面として自然面がそのまま残っている。

図38—21は、逆に剥片の側面部分に自然面が残っている。打面が完全に除去され、その方向に刃部が作出されている。この刃部は連続した調整でつくり出されている。腹面にも連続した調整が見られる。

横形搔器（削器）

第1a類（図37—9）

打撃面の反対側の1側線に、片面の連続した調整を加え直線的な刃部をつくっている。

第2b類（図34—10～13）

両側線に曲線状の刃をつけた削器を一括したが、刃の作り方を見るとそれぞれ異っている。

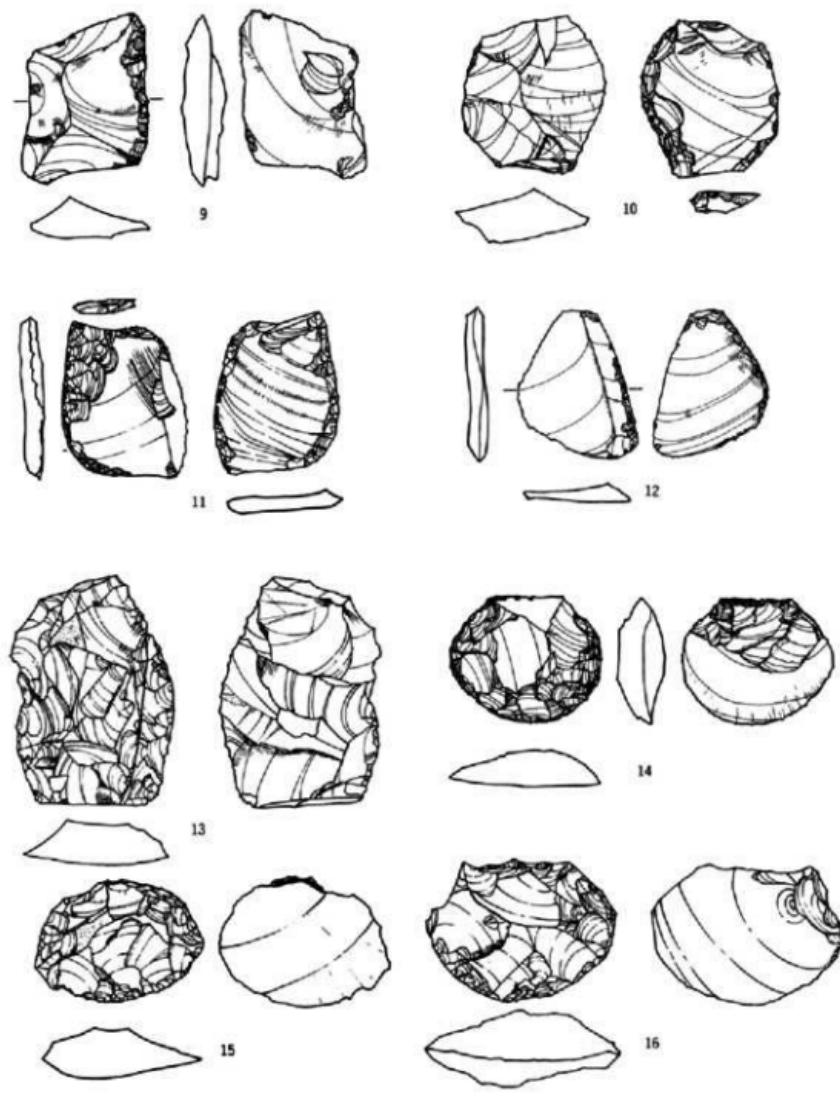


図37 弓張平B遺跡の石・削器（2）

図37-10は、両側線は腹面にだけ加工されている。打面が除去され、切断された先端にも数条の剥離が加えられている。

図37-11は、腹面の両側縁が加工され、背面は基部から左側線に調整がある。打面は切断され除去されている。

図37-12は素材をほとんど変形せずに右側縁は背面に、左側縁は腹面に加工がある。

図37-13は、接合資料である。接合した状態でも両側縁に両面加工による刃部がつくられている。『1・2次調査報告書』図37-19と同じ石器である。L-18-1は単独でも、若干刃部の再生が行なわれている。この二つの石器を完成したものとみなすには若干疑問があるかもしれないが、その後側縁に細かい連続した調整もあるので、一応完成品を見たい。接合した石片(O-18-3)は、再調整の産物と考えられる。

W-1ブロック出土の両面加工の削器(図37-13)は、他の削器とは製作技法が非常に異っている。また図37-11の削器は、CU-5ブロック出土品中唯一の石器であるが、形態、製法の両面から、CU-1ブロック出土品(図36-7)にちかいものといえるだろう。

刃部に抉りのある搔器・削器

図38-22は、縦長の剥片を素材として、左側縁の腹面に連続調整がみられる。そしてその中央部の背面に抉りがある。抉りのある削器である。

図38-23は、右側縁と左上縁との2縁に調整があるが、左上縁の刃部の一部が凹形をしている。削器と抉りのある搔器との複合石器である。O-18-70も2側縁に凹形の刃をもつ抉り入りの削器である。

W-1ブロックから、二つの抉り刃と一つの直線状の刃部をもつ、抉り入りの搔器が2点出土している(『1・2次報告書』図37-20など)。この種の抉り入り搔器が、細石刃石器群に後続する大型尖頭器群や有舌尖頭器群に伴出することが知られている(山形県尼子岩陰-加藤・下平 1957、新潟県本ノ木遺跡-芹沢・中山 1957)。

(文 献)

芹沢長介・中山淳子(1957)「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』12, 1-19頁

加藤 稔・下平 昌(1957)「尼子岩陰のブレイドについて」『山形考古』2, 4-6頁

突出部をもつ搔器など

図38-24は、先端部に突出部をもち、両側辺に背面と腹面からの調整がある搔器である。腹面の調整は、No7・8の搔器やNo11の削器に通ずるところがある。

図38-25は、上端右に斜めの突出部をもつ搔器である。突出部の作出は意識的かどうか、側縁調整の際に残った部分と考えられる。下端の刃部は搔器に似る。大きな横長の剥片を

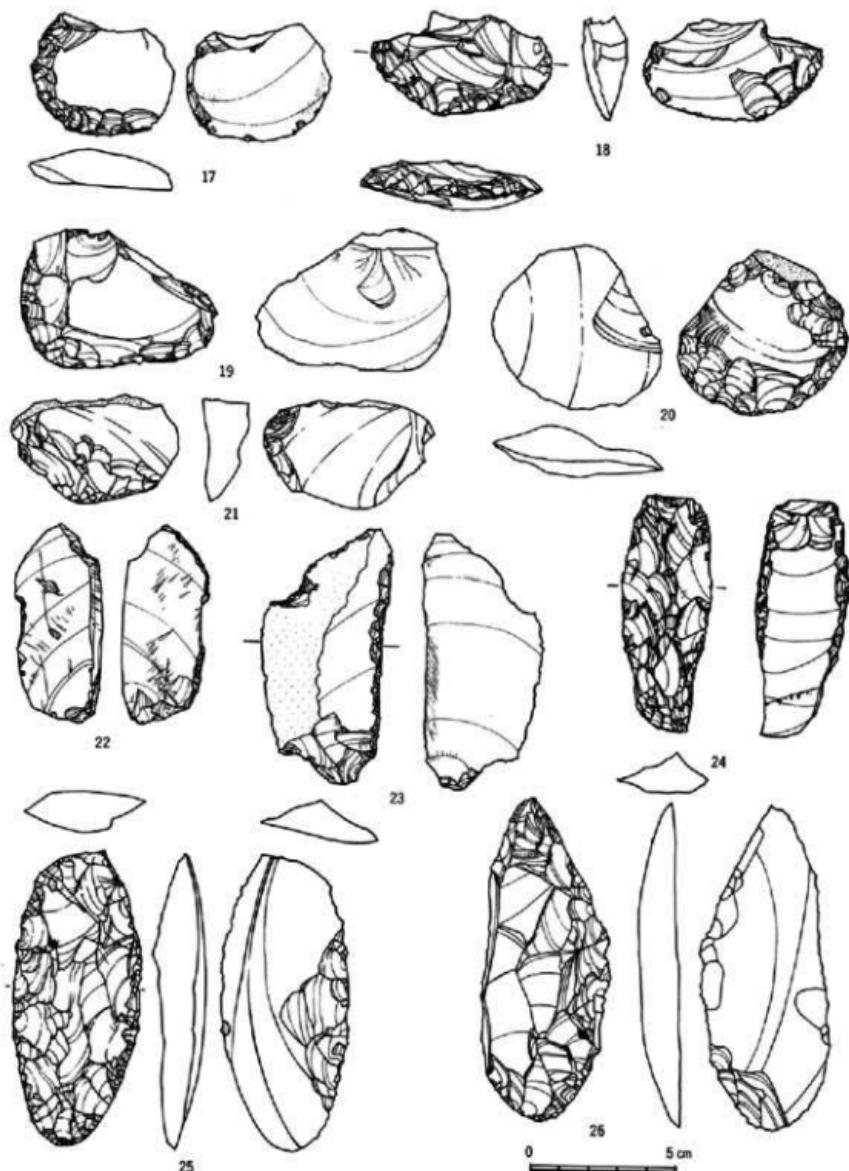


図38 弓張平B遺跡出土の搔・削器（3）

素材としており、腹面に打瘤をのぞく加工がある。ほぼ全周に十分な調整がみられ、搔器と削器を兼用できよう。

図38—26も、横長の剝片を利用している。打点側である右側縁を含んだ調整がみられる。剝片の先端側である左側線は折断された状態にちかく調整はない。上端が尖るように、下端は丸味をおびていることからいえば搔器に類するが、腹面の加工がほとんど右側縁に限られているので、削器の仲間にしておいた。

弓張平B遺跡の搔・削器類の形態分類の中で、量的に多い、I 縦形搔器、II 円弧状搔器、III 削器の三つの石器群について、調整の剝離角を検討してみた。

①縦形搔器のうち、籠状の石器2点(図36—7・8)を除外して、2種の調整が見られる。刃部調整と側縁調整である。

②円弧状搔器は、調整はつながっているように見えても、連続したものではなく、数種の調整があることを指摘しておいた。この調整の相異は剝離角の違いによるものである。

搔器刃部角・搔器側縁角・円弧状搔器刃部角・削器刃部角を計測し、累積度数図として表現してみた(図39)。削器刃部角<円弧状搔器刃部角<搔器刃部の順に、その主要な部分の刃部角は大きくなっている。それぞれの角度の中心は5度から10度ずれながら、大きい方へ移っている。これをみると、円弧状搔器が削器と搔器の中間的性格をもつと考えられる。搔器の側縁調整は、削器の刃部角とほぼ同じ分散を示す。とびぬけているものは、特殊な調整があるからである。

つぎに搔器の刃部角と側縁調整角について他の遺跡出土の石器と比較してみたい。

山形県大石田町角二山遺跡は、「湧別技法」によった細石刃を主体としている。ここに多量の小型の縦形搔器がある(宇野・上野 1975)。角二山の資料から無作為に15点の資料を抽出した。角二山の搔器は、素材の縦長剝片をかなり変形して仕上げている。素材の変形度を比べてみたい意図もある。もっとも両者の形態はかなり異っている(図40)。角二山の搔器は刃部と調整角はほぼ同じばらつきを示す。弓張平の搔器は、両者の間には10度ほどの距たりがある。弓張平の搔器の側縁調整がより浅い角度で施されているだけである。

山形県高畠町火箱岩洞穴は、最下層に微隆起線文土器を包含していた。石器の外に円弧状搔器が13点伴出した。弓張平の円弧状搔器と比較してみる。火箱岩の円弧状搔器も、連続する刃部の角度を計ったので、13点の資料から21ヶ所の計測値が得られた。弓張平の円弧状搔器8点から18ヶ所の計測値が得られている。それを累積度数図にした(図41)。そのばらつきの曲線はほとんど一致する。長軸の相關関係も図化してみた(図42)。火箱岩の資料の方が $y = x$ の直線に集まる傾向が強い。弓張平の資料の方がばらつきが大きい。けれども、二つの別の観点についてみても、弓張平と火箱岩の両者がかなり近似の性格をもつ

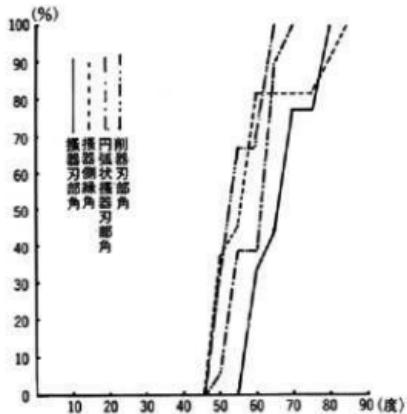


図39 弓張平B遺跡の撗器の類型別
刃部角、側縁調整角累積度数図

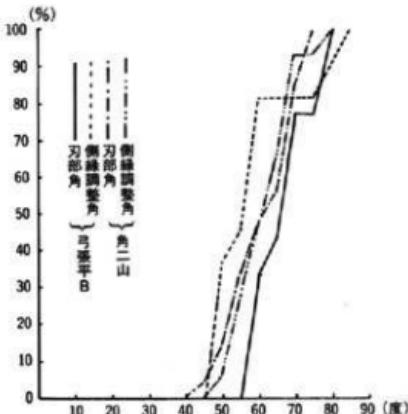


図40 弓張平Bと角二山遺跡の撗器
刃部角、側縁調整角比較累
積度数図

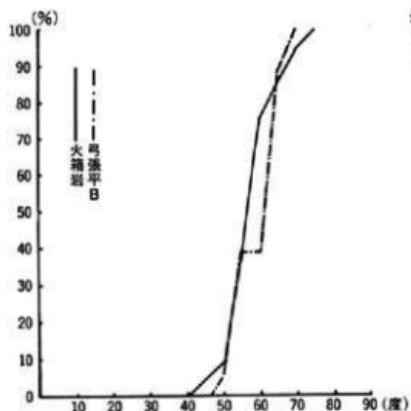


図41 弓張平Bと火箱岩洞穴出土の
円弧状撗器刃部角比較累積度数
図

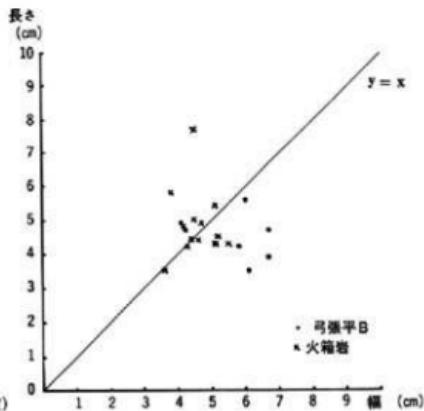


図42 弓張平Bと火箱岩洞穴の円弧
状撗器の長幅相関関係

ことは納得できよう。

以上、発掘調査で得た搔・削器類を、弓張平B遺跡のしめす年代の前・後に位する2遺跡の資料との比較を加えて分析してみた。本報での分類は形態を中心にしたために、従来の分類とは違った部分があったかもしれない。しかし、石器群組成のきわめて片寄っていたと思われるCU-3ブロックの搔・削器類が、この分析によって火箱岩洞穴の資料によりちかいと認められることになった。CU-3ブロックおよびこれに関連するCU-1・2ブロック等の、ある程度の年代的位置づけが可能になったと思われる。

弓張平B遺跡にはさらに2点の搔器がある。第III層出土資料のため別に取り上げた。

第43図1は黒曜石の部厚い幅広の縦長剝片の基部を折り取り、その先端部に調整をほどこして刃をつくった刃が外彫するいわば不定形の搔器である。長さ5.5cm。細石刃文化期前後の越中山A'石器文化の中にも類品がある。

第43図2はほぼ全周に調整がほどこされていて、平面形はヴァイオリン形に整形された縦形搔器である。第III層では数少ない硬質頁岩製品である。長さ38mmで、この地方の縦形搔器では、拇指状のものをぞけば、もっとも小さい形態である。平面形がヴァイオリン形（もしくは、円扇形）をなす縦形搔器は、細石刃文化期に角二山石器文化の特色ある一員として盛行する。角二山でも本例同様に腹面に調整のみられるものが目立つ。弓張平Bの搔器はその祖型であろうか。

（会田容弘・加藤 稔）

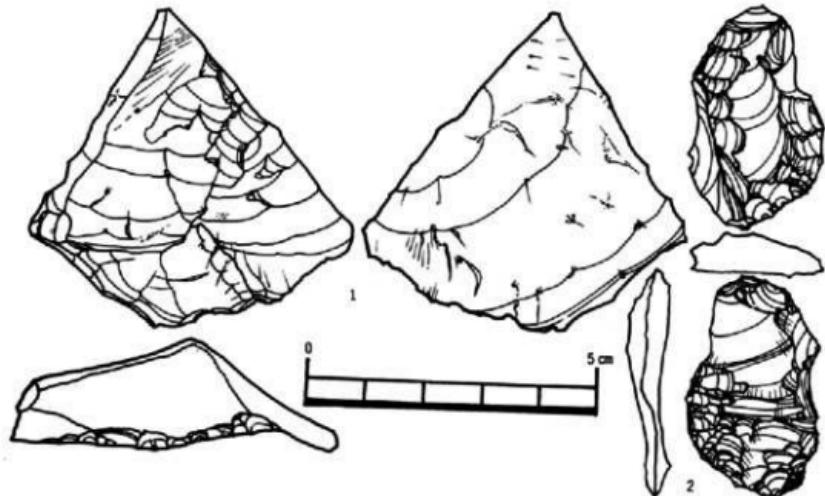


図43 弓張平B遺跡下層出土の搔器

表一 2 弓張平B遺跡出土搔器・削器の属性表

| 遺物番号 | プロック名 | 属性 | | | | | | 備考 | 通番 図号 |
|----------|-------|-------------|-------------|-------------|---------------|--------|--------|-------|-------------------------|
| | | 最大長 (mm) | 最大幅 (mm) | 最大厚 (mm) | 重 量 (g) | 刃部角 | 刃部形態 | | |
| O-18-33 | W-1 | 57 | 38 | 13 | 28.9 | 75° | 半円 | 刺片 | |
| O-18-144 | # | 47 | 32 | 5 | 8.3 | 60° | 斜凸状 | 刺片 | |
| O-19 | # | 57 | 37 | 6 | | 凸状 | 刺片 | | |
| E-23-402 | C U-3 | 82 | 49 | 13 | 63.4 | 75° | 半円 | 刺片 | 36-1 |
| E-23-8 | # | 61 | 51 | 18 | 68.2 | 70~75° | 凸状 | 刺片 | 36-2 |
| E-24-49 | # | 60 | 49 | 13 | 42.1 | 65° | 凸状 | 刺片 | 36-3 |
| F-24-1 | # | 58 | 34 | 11 | 23.9 | 85° | 斜凸状 | 刺片 | 36-5 |
| E-23-7 | # | 40 | 30 | 9 | 12.2 | 85° | やや凸状 | 刺片 | 36-6 |
| E-23-406 | # | 47 | 42 | 15 | 29.1 | 70° | 斜凸状 | 刺片 | 36-4 |
| E-24-188 | # | 38 | 57 | 17 | 40.2 | 70° | 凸状 | 刺片 | 38-21 |
| E-23-3 | # | 49 | 41 | 12 | 26.7 | 65° | 凸状 | 刺片 | 38-17 |
| E-23-4 | # | 43 | 51 | 15 | 34.5 | 65° | 半円形 | 刺片 | 37-14 |
| E-24-5 | | 56 | 60 | 15 | 47.0 | 65° | 半円形 | 刺片 | 38-20 |
| E-23-80 | C U-3 | 50 | 54 | 15 | 38.9 | 60° | 半円形 | 刺片 | 37-10 |
| O-18-10 | W-1 | 110 | 43 | 15 | 82.6 | 60° | 彈頭状 | 刺片 | 38-26 |
| O-21-10 | W-2 | 101 | 43 | 17 | 72.0 | 60° | 彈頭状 | 刺片 | 38-25 |
| E-23-2 | C U-3 | 47 | 67 | 24 | 67.5 | 60° | 凸状 | 刺片 | 37-16 |
| X-43-7 | 南区 | 42 | 58 | 20 | 41.7 | 50° | 凸状 | 刺片 | 37-15 |
| F-24-15 | C U-3 | 49 | 67 | 14 | 43.7 | 60° | 斜凸状 | 刺片 | 38-19 |
| E-23-398 | C U-3 | 35 | 61 | 14 | 26.9 | 55° | 凸状 | 刺片 | 38-18 |
| E-24-188 | # | 38 | 57 | 17 | | 55° | 凸状 | 刺片 | |
| O-18-3 | W-1 | 78 | 52 | 21 | 34.13 L:62 | 60° | やや凸状 | 刺片 | L-18-1と複合した状態で考えると、97.8 |
| O-18-97 | W-1 | 95 | 61 | 15 | 104.8 | 60° | やや凸状 | ? | 37-13 |
| F-24-64 | C U-3 | 52 | 36 | 5 | 11.2 | 45° | 直線、斜凸状 | 刺片 | 37-12 |
| V-19-1 | P-2 | 56 | 42 | 7 | 21.3 | 65° | 直線、斜凸状 | 刺片 | 37-11 |
| G-21-2 | | 88 | 41 | 12 | 41.9 | 50° | 直線 | 石刀状刺片 | 38-23 |
| E-23-6 | C U-3 | 51 | 41 | 14 | 30.8 | 65° | 直線 | 刺片 | 37-9 |
| C-18 | C U-2 | 45 | 43 | 7 | 17.4 | 60° | 直線 | 刺片 | |
| E-24-33 | C U-3 | 67 | 30 | 6 | 13.3 | 50° | やや凸状 | 石刀状刺片 | 38-22 |
| Q-19-6 | | 87 | 40 | 17 | 57.9 | 50° | 直線 | 刺片 | 36-8 |
| Z-22-2 | C U-1 | 54 | 40 | 13 | 30.6 | 40° | 直線 | 刺片 | 36-7 |
| 中央区発掘 | | 72 | 39 | 13 | | 45° | 直線 | 刺片 | |
| B-17-34 | W-1 | 59 | 30 | 8 | 30.9 | 55° | 凹状 | 刺片 | |
| B-18-70 | W-1 | 68 | 42 | 7 | 34.5 | 55° | 凹状 | 刺片 | |
| N-18-57 | W-1 | 37 | 30 | 4 | 3.9 | 40° | やや凹状 | 刺片 | |
| J-19-3 | | 81 | 30 | 13 | 33.2 | 50° | 尖頭形 | 刺片 | 38-24 |

E 彫刻刀形石器

弓張平B遺跡出土の彫刻刀形石器は2点しかない。一つはC'-23区出土No17(図44-1)の資料で石刃を素材として、折断によって打面を形成し、そこから一撃で彫刀面をつくり出した、平坦角形の彫刻刀形石器である。上下両端に彫刀面をもつ。図の上端部分の打面は叩き折りで形成された。彫刻刀面は素材の腹面側にあらわれ、彫刻刀面と主要剝離面とのなす角度は105°である。また下端部分の打面は両手折りで形成され、打面には磨痕が見られる。彫刻刀面は素材の背面側にあらわれ、彫刻刀面と主要剝離面とのなす角度は55度である。

この形態の彫刻刀形石器は、新庄市山屋遺跡、同横前遺跡(加藤 1964)他で出土している。東山型ナイフとしばしば伴う「小坂型彫刻刀」の仲間とみられ、埼玉県砂川遺跡での出土例(鈴木 1974)もある。

もう一つは、R-18区で出土したII層下部の石器群に伴う平坦彫刻刀である(図44-2)。部厚い幅広い剝片を素材とし、打面・バルブを除去した後、素材背面側に3条の櫛状剝離を施している。これに近い例として、ナイフ形石器を主体として尖頭器も伴った小国町平林遺跡(加藤 1963)に平坦型彫刻刀の仲間がある。また、形態的には朝日村越中山K遺跡で彫刻刀と分類した例にも近いものと考えられる(加藤 1975)。(矢口広道・加藤 稔)

表-3 弓張平B遺跡出土彫刻刀形石器の計測値

| 番号 | 遺物番号 | ブロック名 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 素材 | 捕図No |
|----|----------|-------|----|----|----|------|----|------|
| ☆1 | R-18-14 | W-3 | 57 | 47 | 16 | 44.9 | 剝片 | 44-2 |
| ☆2 | C'-23-17 | C U-3 | 43 | 23 | 8 | 9.9 | 石刃 | 44-1 |

(文 献)

加藤 稔(1963)「山形県平林の石器文化」『考古学集刊』2-1 1-16頁

加藤 稔(1964)「山屋・東山遺跡」新庄市

鈴木次郎(1974)「砂川遺跡の石器群」『砂川先土器時代遺跡』所沢市 49-59頁

加藤 稔(1975)「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2 112-133頁

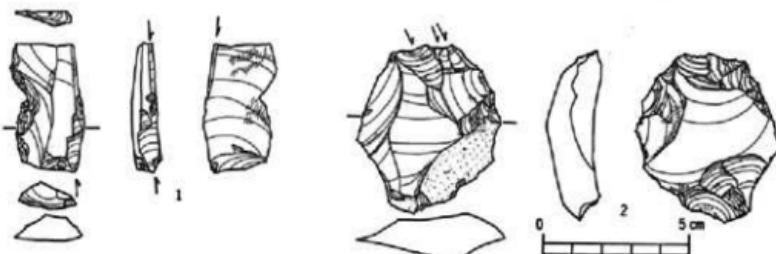


図44 弓張平B遺跡出土の彫刻刀形石器

F 石刃

旧石器時代の縦長の剝片のうち、長さが5cm以上ありかつ幅の2倍以上あるものを石刃とよんでいる。もっとも石刃というには両側縁が平行で、さらに背面に両側縁とほぼ平行の稜線が1ないし数条走ることも条件に加わる。これは、石刃が石核から連続的に剥離されたことを物語っているからである。石刃を剥離するための石核はとくに石刃核とよばれる。

弓張平B遺跡では、中央区の第II層および第III層から若干の石刃が出土している。

図45-2は、調整打面をもつ石核から剥離された石刃である。背面中央に1条の稜線が通る。先端が欠損している。左側縁に細かい刃こぼれがある。最大長72mm、最大幅32mm、最大厚8mm、硬質頁岩製。第II層は西区で有舌尖頭器を出した層序である。

図45-1は、打面付近が欠けているので、石刃核の打面の状況は分らない。背面中央に1条の稜線が走り、背面の大きい二つの剥離面はいずれも打面側からの加撃による面形成であることをしめている。先端も欠損しているが、現存長72mm、最大幅36mm、最大厚10mm、玉髓製。現存部についてだけでも弓張平B遺跡第III層出土の最大品である。それが必ずしも石刃核ではないかもしれないが、かなり大きな石核（原石）を素材として使用したことを物語る。

（加藤 稔）

G ナイフ形石器

石刃または剝片を素材とし、一辺を鋭い刃部として残しながら、他の縁辺に背刃し加工をほどこした石器を、ナイフ形石器とよぶ。ナイフ形石器は、弓張平B遺跡では、中央区から多く出土した。出土層位は、第III層下部に集中している。若干の遺物が第II層中からも出土したが、これらは土層中の移動と考えられる。第4次調査終了時点で、計16点が得られている。

ナイフ形石器は、その素材と形状や調整剥離の部位によって、大きく6形態に区分できる。

A 石刃を素材とした、主に基部加工のナ

イフ形石器—杉久保型ナイフ（I類型）、

東山型ナイフ（II類型）など。

B 石刃ないし縦長剝片を素材とし、2側

縁を加工したナイフ形石器。しばしば素

材を斜めに断ち切るように調整剥離がほ

どこされる（切断技法）、一茂呂型ナイフ

など（III類型）。

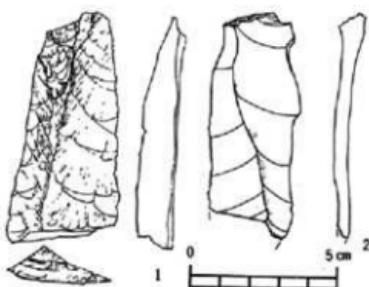


図45 弓張平B遺跡出土の石刃

- C 横長剝片を素材とし、先端の背と刃部のなす角度が大きく、刃の位置が上方に片寄るナイフ形石器—一切出形石器(IV類型)。
- D 縦長剝片を分断・分割したような台形をしているナイフ形石器—台形状石器(V類型)。
- E 横剥ぎ剝片を素材とし、1個縁のみを加工したナイフ形石器—国府型ナイフなど(VI類型)。
- F 剥片を部分的に折断あるいは切断するような刃潰し加工によって仕上げられているナイフ形石器(VII類型)。

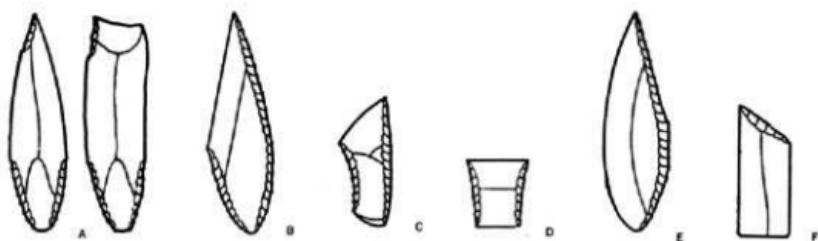


図46 ナイフ形石器の形態分類

このうち中央区で発見されたのは、A・B・C形態に属するもので、東区から1点だけA形態のものがある。これらを基部および刃部の形態に着目してつぎの6類に細分してみた。なお、中央区出土のナイフ形石器の大半は黒耀石製で一部硬質頁岩製がある。東区のナイフ形石器は石刃を素材とした硬質頁岩製品である。

第1類(図47-1)

硬質頁岩の石刃を素材とした。基部に打面をのこし、基部周辺の背面両側縁と右側縁の腹面に調整がある。先端を欠くが左側縁に刃潰し加工が見られる。石刃の稜線が先端でY字状に三叉する。小国東山型ナイフに類する。

第2類(図47-2・3)

縦長の剥片の打面を基部とし、基部付近に集中的に調整剝離をほどこしている。No.2は先端部左側縁に刃潰し加工が見られる。稜線は先端まで真直ぐに通る。No.3は剥片の先端を基部とし右側縁の全部に刃潰し加工がみられる2側縁加工のナイフであるが、素材の主軸と石器の軸線とが一致するため本類に加えた。いずれも刃部は全長の2分の1以上の長さをもっている。

第3類(図47-4・5・6)

尖頭器状の先端と、それにつづく全長の2分の1ちかい刃部をもつ典型的な2側縁加工

のナイフ形石器である。縦長の剝片の打面を基部としているが、打面付近は素材を斜めに断ち切ったような急角度の調整剝離、すなわち切断技法がみられる。No.4は左刃、No.5・6は右刃である。

第4類(図47—7・8)

基部が鋭く尖げられ、全体が三角形状の2側縁加工のナイフ形石器である。短い側縁に剝片先端の切断技法がみられる。No.7の長い側縁のほとんどは素材の自然面を加工せず利用しているが十分に刃漬し的効果をもっており、形態の点から本類にふくめた。No.7は右刃、No.8は左刃である。

第5類(図48—9・10・11・12・13・14・15)

弓張平B遺跡のナイフ形石器の半数をしめる形態のもので、2側縁加工のナイフのうち刃が上方に片寄りをみせる、基端部が直線をなす類である、素材は縦長の剝片で、打面はすべて取り去られ、すくなくとも1側縁には切断技法がみられる。素材の打面を先端の刃漬し加工部分に利用した例が多い。No.12～14は、側縁の一方に調整をほどこさない部分がみられる。刃部を欠くNo.15をのぞくと、右刃はNo.14の1例のみである。

第6類(図48—16)

横長剝片を素材とし、切出し小刀に似る形態に仕上げた、いわゆる切出形石器である。左側縁は素材を折断したままで調整を加えていない。最近は、V類と区分した縦長剝片素材のナイフ形石器をも切出形石器と称する向きが多い。

以上のナイフ形石器は、I類の石刃を素材とするナイフ型石器の例をのぞいては、これまでに東北地方で注目されたことのない、特異な存在であるといわねばならない。從来この地方で検出されてきたナイフ形石器は、杉久保型ナイフにしろ、東山型あるいは米ヶ森型ナイフにしろ、素材である石刃を調整剝離によって大きく変形させることはなかった。強いていえば、弓張平の第II類ナイフが、茂呂型ナイフの仲間とみられる福島県いわき市大畑遺跡出土品に類似する。弓張平のナイフ形石器第II～VI類は、切断技法と急角度の調整をもつという意味合いにおいて、南関東から中部地方にかけて普遍的にみられる小型のナイフ形石器群と同類といえよう。弓張平では、先端を斜めに断ち切ったり、側刃に急角度の調整剝離を加えただけの、いわゆる部分加工のナイフ形石器はない。東北南部から北関東、越後の資料が不足しているいま、南関東のナイフ形石器群との早急な対比は慎むべきであろうが、例えば東京都鈴木遺跡や前原遺跡のIV層上半部のナイフ形石器群に形態上の類似点を見ることができる。おそらく終末期のナイフ形石器の一員であろう。I類の東山型ナイフ形石器とほぼ同時期とみられる。

(山口博之・加藤 稔)

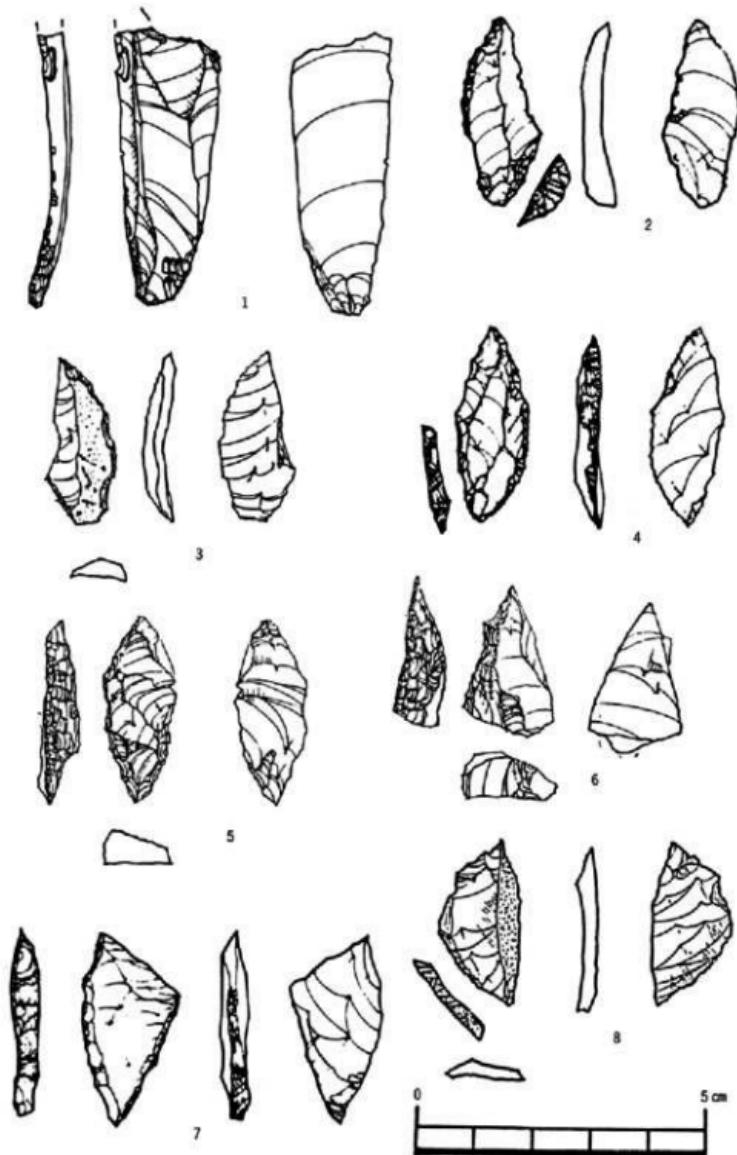


図47 弓張平B遺跡出土のナイフ形石器（1）

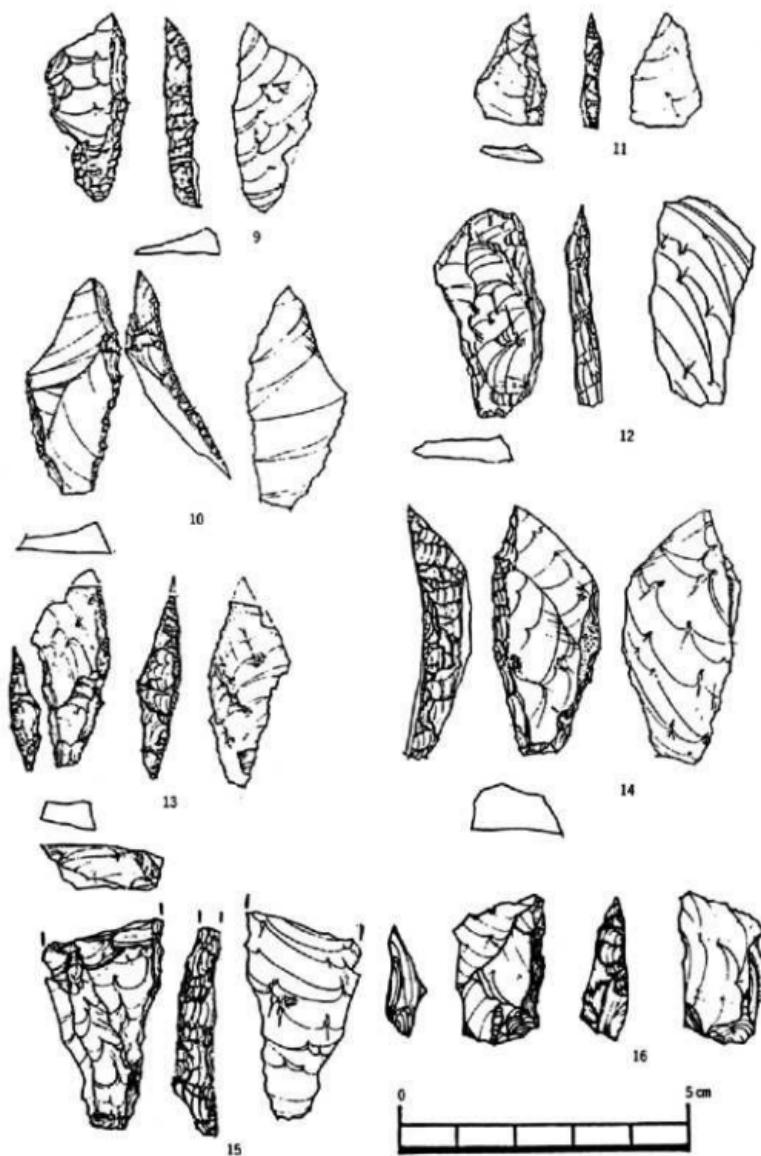


図48 弓張平B遺跡出土のナイフ形石器（2）

5 ナイフ形石器表面のキズ痕の観察

石器の使用痕の観察は、石器の使用方法（機能）を考えるうえで必要な研究分野である。今回は弓張平B遺跡第III文化層出土の黒曜石製ナイフ形石器のキズ痕の観察を行なった。まず肉眼で磨滅痕・擦痕が観察できたのはD-18区出土のナイフ形石器（№9）1点だけであった。残念ながら表層からの採集品であるが、強度の磨滅と擦痕は使用痕と推定された。磨滅痕と擦痕は主に刃部腹面で観察され、背面には使用の結果生じた小剝離が観察された。図49-1は、磨滅痕の全体を撮ったもので、刃部から刃済し部分にかけて顕著に見られる。図49-2・3では磨痕がよく観察され、右下から左に向ってキズが走り、使用時の石器の動きの方向が推測される。磨消する範囲も光の乱反射部分と無反射部分とで識別することができる。図49-4は図39-3の一部を拡大してみた。

図50-5～8は、Y-23区出土のナイフ形石器（№12）の拡大写真である。左右方向のキズ痕、縦方向のキズ痕が多い。斜め方向のものも混り、他のナイフ形石器に比べて圧倒的にキズ痕の数が多いのが特徴である。考えられることは、この石器が土中に埋没する過程もしくは埋没後にも、自然的営力によってもキズ痕がついたものであろうかということである。刃部付近には刃部に平行するキズ痕が多い。使用痕であろう（図50-6）。刃済し部にちかい部分では横方向の細かいキズ痕に加えて、不定方向の深いキズ痕がある（図50-7）。基部にも、縦、横、斜め方向のすべてに細かいキズ痕が数多く残っている（図50-8）。

今回は単にキズ痕の観察にとどまったが、実験的な使用痕との対比、走査型電子顕微鏡の使用など、今後取り組むべき課題が多い。

実体顕微鏡の使用については、山形大学教育学部地学研究室のお世話になった。

（青木敏雄）

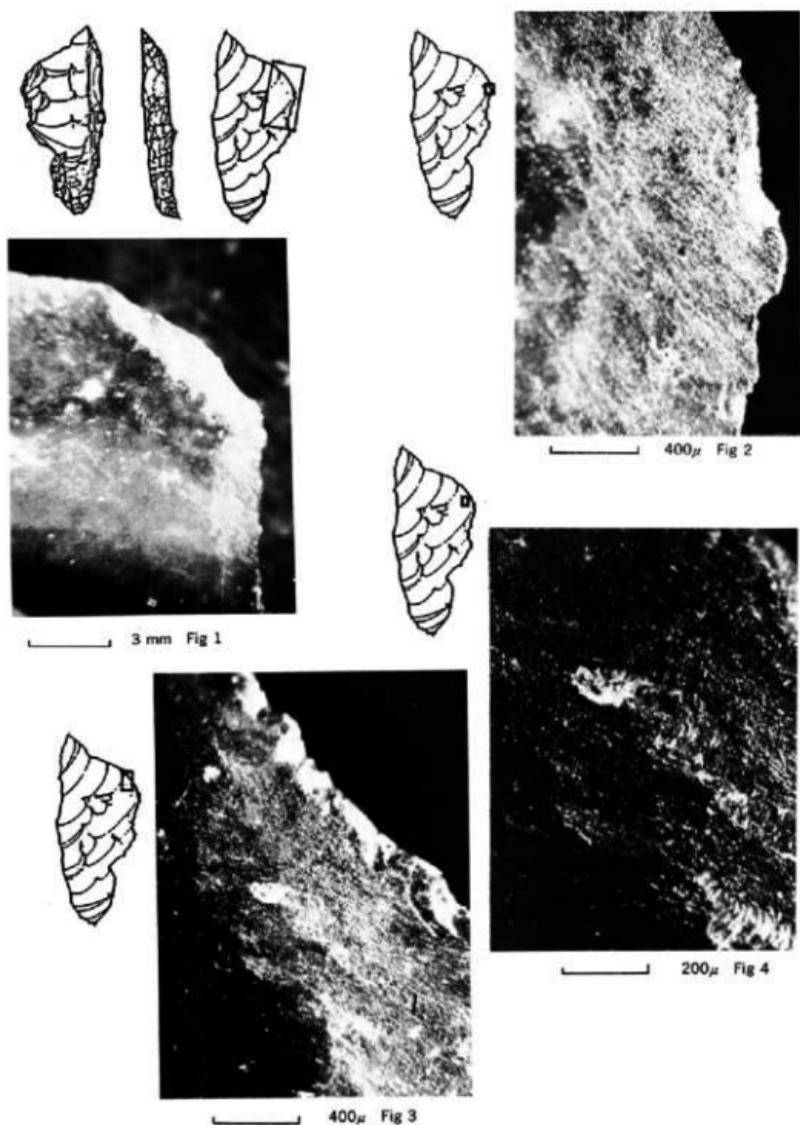


図49 ナイフ形石器表面のキズ顕微鏡写真（1）

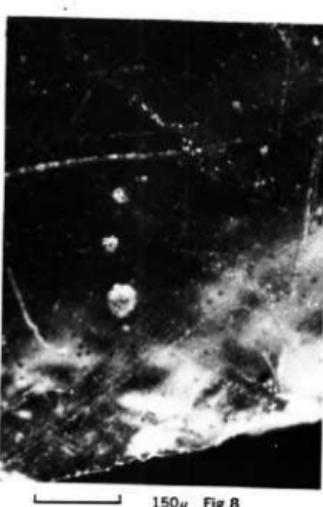
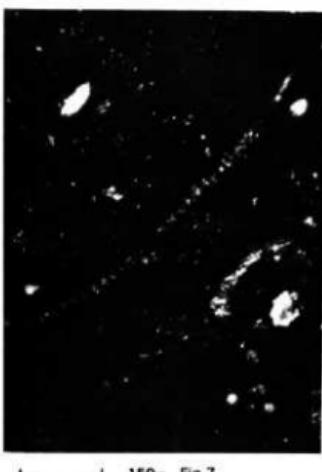
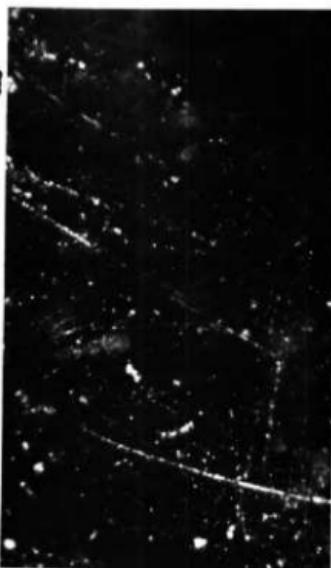
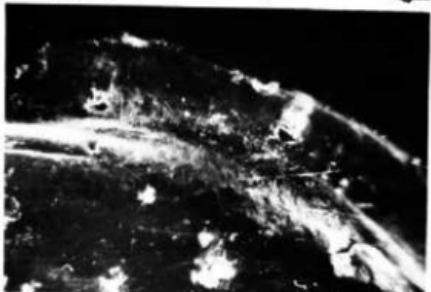
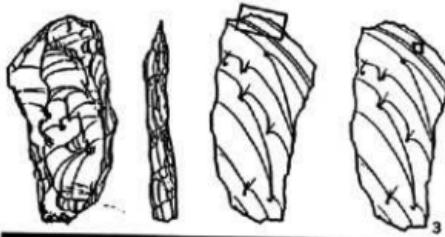


図50 ナイフ形石器表面のキズ顕微鏡写真（2）

6 遺物の平面分布と遺構

(1) ブロックの策定

遺跡での遺物の平面分布の最小単位として、われわれはブロック(block)という語を用いてきた。いくつかのブロックがとらえられ、その相互間に有意な関連が認められたばあい、その上位概念としてユニット(unit)という語を用いる。

弓張平B遺跡の調査では、層位的に四つの文化層をとらえることができた。そのうち縄文時代の第I文化層は、攢乱がはなはだしいためこれを除外する。そして三つの平面を仮定して、計17のブロックを策定した。この層位的分離からだけでは、同一平面に存在したからといって、同時期存在と結論づけることは危険である。いくつかのブロックの同時存在を認め、ユニットとして把握するには接合資料の存在などに裏付けられるブロック同士の相互関係を究明しなければならない。現段階でブロックを超えて接合資料を確認できたのは西区の例しかない。今後の作業の前提として、石器群の型式の類似をも併用しておくこととする。

なお、各ブロックの名称は、第1次調査開始時から慣用してきた西区(western)、西南区(south western)、中央区(central)等の呼称の頭文字を用い、中央区については、第II層を上層(Upper layer)、下層(Lower layer)の各頭文字を組み合せた。

これまでに、西区に5ブロック(W-1～W-5ブロック)、西南区に1ブロック(SW-1ブロック)、中央区の上層に5ブロック(CU-1～CU-2、CU-4～CU-6)、下層に6ブロック(CL-1～CL-6)の計17ブロックを策定できた。外にも東区および南区のグリット内に遺物の出土があり、ブロックを形成するものと予想されたが、発掘面積が不十分なためにブロックというとらえ方はしなかった。

(2) 西南区のブロック

SW-1ブロックは、西区の南25mほどの距ったところにある。弓張平の台地の西側斜面の遺物散布地点である。北側は宅地造成の際削平されている。ブロックは東西径約8m、南北径5m(現在)の拡がりをもつ。おそらく径10mほどの大きさだったろう。剝片・碎片類が多く、わずかに1点の石鎌、1点の石匙、1点の石籠と3片の土器が発見されているだけである。土器は縄文時代前期室浜式期にあたる。

このブロックの西側には石組の遺構がある。一部に炭化物をふくみ炉とみられる。竪穴住居跡の存在を予想して周辺を精査したが、柱穴、壁面など住居跡の証拠は得られなかつた。炉をもつ野外の石器製作所なのか、あるいは野外の炉の周辺に石器製作後の碎片を捨てたものか。いまのところ、このブロックと関連するような他のブロックは近接地点に発

見されていない。

(3) 西区第II層の各ブロック

W-1ブロックは、弓張平の台地の稜線である平坦面から西へ傾斜する緩斜面に位置する。N-18区の台石を中心に東西径6m×南北径7mを範囲とする。有舌尖頭器、有肩尖頭器、木葉形尖頭器、縦形搔器、削器、抉入状搔器、突出部ある搔器などが発掘された。遺物の大半は尖頭器の製作過程で生じた剝片と碎片である。石器類の平面分布は、台石に近く密で遠くなるにつれ粗となる。搔器、削器類は破損品が少く、ブロックの東側に集中している。大型木葉形尖頭器群もほぼ完形で、ブロックの東南部で発見された。有舌および有肩の尖頭器の多くは欠損品でブロックの西から北にかけて存在した。本ブロックは、尖頭器製作の場と考えられるが、他の石器群の仕上げ製作の場を兼ねたか、あるいは東側の碎片のほとんどない部分では、動物を解体しての食料の準備や獸皮の加工など、日常生活の行動の場であったのか。

W-2ブロックも、台地の平坦面から西に傾斜する緩斜面に位置し、W-1ブロックの南にあたる。ブロックの西側は削平されていて完全でない。石片類の分布は粗である。石器は、突出部のある搔器が1点だけで、大半は打面調整のある大型の剝片である。W-1ブロック出土品と接合する縦長剝片がある(図51・52)。これをふくむ接合資料は、原礫から剝片を剥離する工程の第2段階にあたる、最初の打面形成後の石核調整のための剝片群とみられる。大半に原礫の自然面が大きくのこる(図51)。

W-3ブロックは、台地の平坦面から、西への傾斜変換点に位置し、W-1ブロックの東にあたる。R-18区を中心として、径3mを範囲とするブロックである。石器は大型の優美な月桂樹葉形尖頭器、基部に丸みをもつ木葉形尖頭器、平坦彫刻刀の外は剝片のみである。剝片類の分布は、彫刻刀の周辺でやや密であったが、他は粗である(図53)。

W-4ブロックも、台地の平坦面から西への傾斜変換点に位置し、Wブロックの北にあたる。Q-16区を中心として、径3mを範囲とするブロックである。石器は第5類と分類した両面加工尖頭器と第1類とした石鎚の外は剝片だけである。遺物の分布は一般に粗である。

W-5ブロックは、W-4ブロックの北にあたり、北西へ傾斜する緩斜面に位置する。遺物は土器3片と使用痕ある剝片の外は、剝片と碎片であり、Q-12・13、R-12・13区にきわめてまばらに分布する。土器は細片で型式を同定し難い。

以上西区第II層の各ブロック中、相互に関連のみられたのはW-1ブロックとW-2ブロックである。この二つのブロックの間には、図52において実線で結んだ縦長剝片群の接合関係がある。両ブロックとも石材はすべて硬質頁岩であって、今後の作業によってはさ

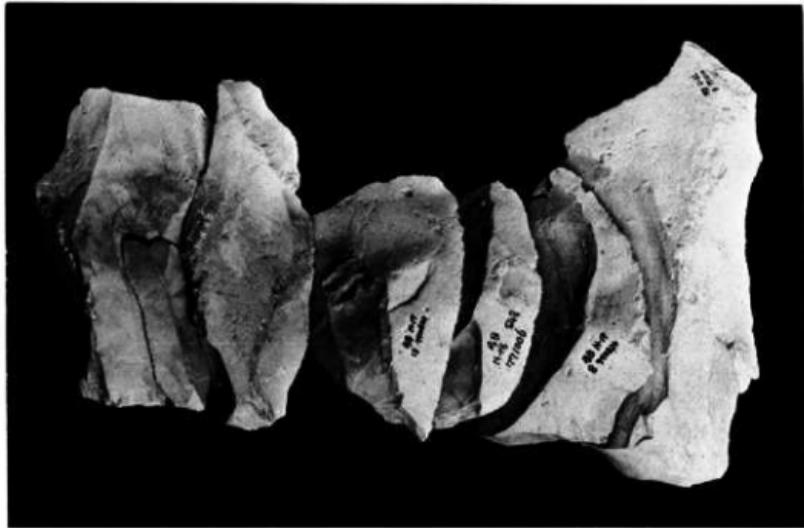


図51 弓張平B遺跡西区W-2ブロック出土縁長剝片の接合資料

らに接合資料の増加が期待される。

出土石器の形態上の類似については、W-2ブロックの突出部ある搔器(図38-25)と、W-1ブロックの削器(図38-26)とに注目したい。

W-1ブロックとW-2ブロックとの性格についてみると、前者には有舌尖頭器石器群がもつほど十分な種類の石器があるが、さらに台石を中心とする大量の剝片や碎片の分布密度がひじょうに高い。これに対し、後者の剝片は打面調整のある大型の剝片が主である。W-1ブロックが有舌尖頭器を中心とした石器製作の細部調整による仕上げの場とみられるのに対し、W-2ブロックは、これら石器群の素材生産のための場ととらえてよさそうである。両者にま

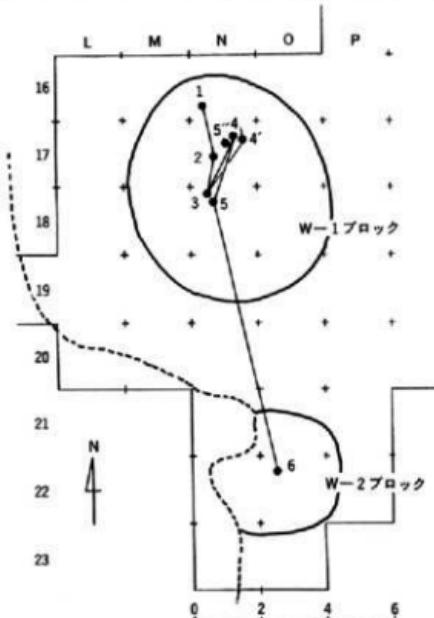


図52 西区W-1、W-2ブロックの接合縁長剝片の出土位置

たがる接合資料は、調整打面をもつ縦長剥片が8点接合したもので、うち6点は自然面を残している。原礫への加熱の初期、つまり打面形成直後の石核調整剥片群と考えられる。ところで、両ブロックから尖頭器の直接素材となりそうな縦長もしくは横長の大型の剥片や石核は発見されなかった。両者の中間の工程に関連するブロックが他に存在したが未発見なのか、それとも生産された大型剥片の類はすべて石器として加工されてしまったのか未解決である。

接合資料の存在から同一時期と判断したW-1、W-2の両ブロックともっとちかいW-3ブロックとが関連のあるものかどうか積極的な証拠はない。ただW-1ブロックの大型尖頭器とW-3ブロックの木葉形尖頭器の間には、形態と製作技法上に類似する点があるように考えられる。またW-2ブロックとW-3ブロックの調整打面をもつ剥片の調整の方法の分析から、その技術的な面での関連をさぐることができるようにも思われる。

なお、W-4ブロックでは石鏃が、またW-5ブロックでは土器が出土している。W-4ブロックの石鏃は第1類と分類したもので、CU-3ブロックにも類品がある。両者は年代的にちかいと思われる。W-4・5の両ブロックは、W-1～3の3ブロックよりもより上位で石器類の出土がみられなくなる。この点からもやや新しい時期のものと考えることができよう。

(4) 中央区第II層の各ブロック

第1・2次調査で、中央区の黒曜石製ナイフ形石器を出土した第III層よりも上位に、若干の遺物が包含されていることを知ったが、どのような遺物の分布状況をしめすかまたその石器組成については十分に把握することができなかった。そこでとりあえず西区の層位との対比を試み、第I層から発見された石鏃その他を第I文化層とし、縄文時代に相当するものとした。また石刃の出土した第II層を第II文化層とし、西区の有舌尖頭器石器群とほぼ同一の時期に当るだろうと想定したのであった。

今回の第3・4次調査によって、いわゆるII層の石器文化の様相を明らかにすることができた。その結果、前回の第I文化層、第II文化層の区分は再検討を要することとなった。

もともと弓張平B遺跡では、縄文時代の遺物はかなり広範囲に散布しているのであるが、第I層は開墾、耕作によって攪乱され、他の時代の遺物もいわば渾然一体となって発見され、その全体像を明確にすることはできなかった。この時代については、前に略説した西南区のSW-1ブロックがかろうじてその姿を見せてくれたに過ぎない。したがって、中央区で、第III層より上層で確認されたブロックとその文化層はすべて第II層中のものである。

現在のところ、中央区上層には最低5つのブロックが存在したと考えている。遺物が大

11

N
D
S

12

13

14

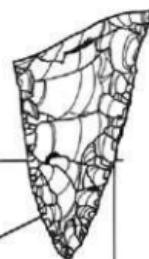
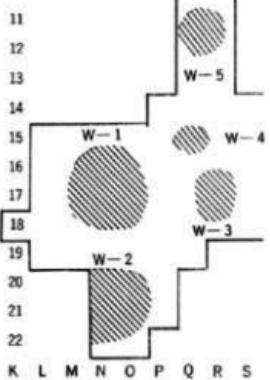
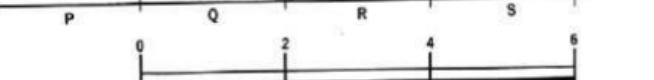
15

16

17

18

19



量に出土しているので、遺物の平面分布図作成の作業が完成していないが、各発掘区ごとの遺物出土範囲で、ブロックの輪郭をえがいてみたい。

CU-1ブロックは、台地の平坦面のほぼ中央部にあたる。小さくとも径5mほどの拡がりがあったと考えられるが、開墾と耕作で包含層が削られたとみえ、遺物は垂直移動のあった部分に断片的に存在している。このブロックからは、第3d類とした石箆形の削器1点と円弧状搔器の断片が出土している。

CU-2ブロックは、CU-1ブロックの東北東10mの距離にある。径3mほどのブロックである。石器は第6類の小型尖頭器がある。碎片は500点ほど出土している。

CU-3ブロック(注)は、CU-2ブロックの南東南に接するようにして存在する。台地の平坦面のやや東よりで傾斜変換線にちかい、長径が10mに及ぶほどの大きなブロックである。遺物の総量は1000点を下らない。うちE'-24区からだけでも実に566点もの遺物が出土している。石器・剥片から微小な碎片にいたるまで、濃密な分布をしめている。このブロックの特徴は、多くの石器をふくむにもかかわらず、そのほとんどが搔器、削器でしめられていることである。しかも石器群はあるまとまりをもって存在する傾向がある。例えばE'-23区に搔器、削器がまとめて分布したブロック全体の石器群の内訳をみると、搔器は形態が多様である。円弧状搔器が相当量ある。各種の削器が存在する。尖頭器は小型の第6類木葉形尖頭器がある。また、D'-23・24からE'-25区にかけて、半円形をえがく配石(抜き取り痕)が存在した。

CU-3ブロックの石器群は、これにもっともちかい組成をしめすものとして、山形県高畠町火箱岩洞穴の第IV-V層石器群がある。火箱岩では、第IV層から短縄文、瓜形文土器が、第V層からは微隆起線文が出土している。弓張平CU-3ブロックでは土器が発見されていない。もともと弓張平B遺跡からは全体的に土器の出土が少ない。これは開墾、耕作による破壊の外に、土壤の風化作用をも考えられよう。したがって状況がよければ、CU-3ブロックに関連して、土器が共存した可能性があろう。

CU-1、CU-6、W-4ブロックなどの距離はいずれも6~10cmばかりあり、CU-5ブロックの配石を中心とした空間は大きな意味をもつと予想される。この範囲に、配石以外の遺構はなかった。

CU-6ブロックは、CU-5ブロックの東北東10mのところにある。台地の平坦面のほぼ中央にあたる。

以上のように、中央区上層では、5つのブロックを想定したが、これはある程度暫定的
(注)調査の途中で、CU-3ブロックの東南に、CU-4ブロックを想定したが、分布図を作製したところCU-3ブロックに含まれることがわかった。よってCU-4ブロックを削除する。

なものである。CU-1ブロックはさらに広がる様相をみせており、いくつかのブロックはまだそれだけで完結しているとみることはできない。遺物の平面分布図が完成した時点で、それは決定されるはずである。

CU-1～CU-6の各ブロックは、その出土層位がほぼ同一の平面上にあること、また石器群の形態や製法に共通性をもつことをもって相互に関連するブロックと推測している。そして、これらの石器群が一つの組成とみとめられるならば、W-4ブロックの尖頭器、石鏸もこれらにふくめられる予感がする。W-5ブロックについても検討の余地がある。おそらく、CU-1ブロックを中心にこれらの5ないし6つのブロックが一つのまとまりをもつ確率はかなりに高いものだと考えている。

(5) 中央区第III～IV層の各ブロック

弓張平B遺跡中央区の下層では、計6カ所の石器集中地点（ブロック）と3カ所の疎集中地点（集疎遺構）が確認された。集疎遺構はいずれもブロック内にふくまれる。

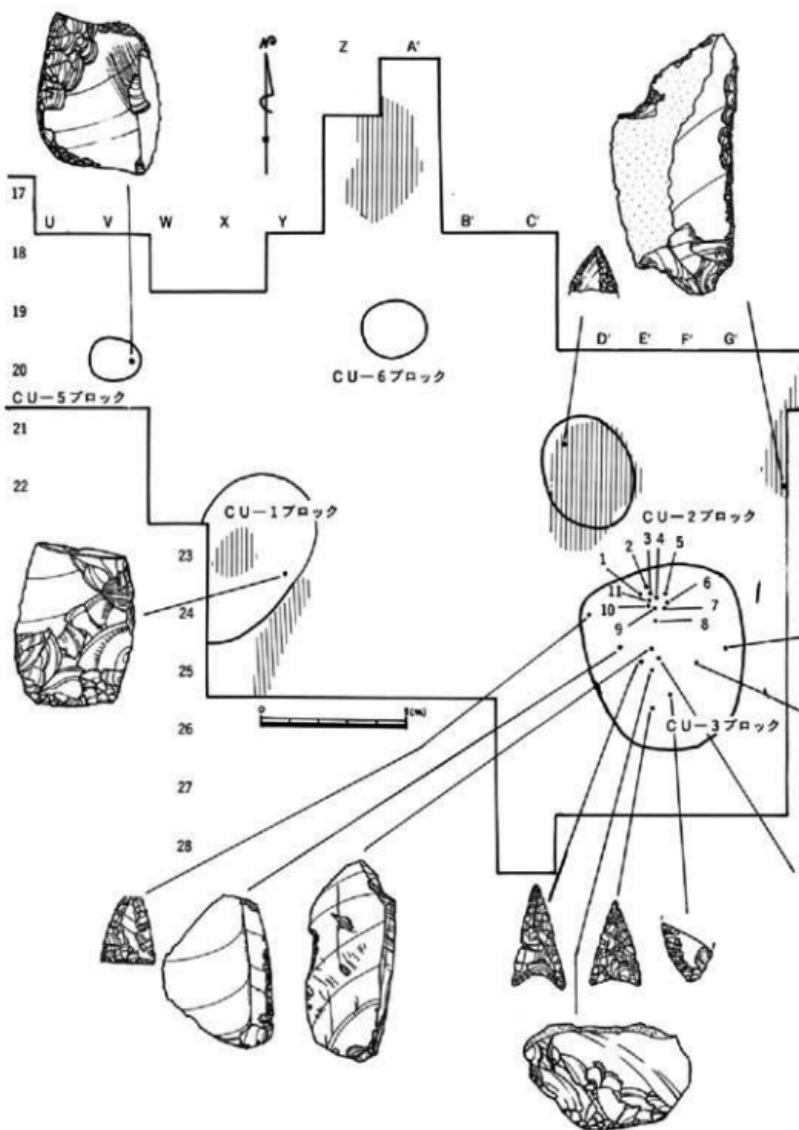
CL-4ブロックは、台地の中央の平坦部にある。Z-20～A'-20区に集中するブロックである。径2mばかりの範囲にまばらな焼けた集疎があり、周囲は炭火物の散布がいちじるしい。1点のナイフ形石器がブロック内で検出された。

CL-2ブロックは、CL-4ブロックの東4mの距離にあり、台地中央のC'-20・21区を集中地点とするブロックである。1点のナイフ形石器、数点の石核、多数の剝片を内容とする。とくにC'-20区の東南隅で1点の石核の周りに集中して多数の剝片が検出された。剝片群のすぐ横に径1mほどの疎群が存在した。

CL-3ブロックは、CL-4ブロックの東北3mの距離にある。台地中央部の平坦面に位置する。B'-19、C'-19区を集中地点とするブロックである。1点のナイフ形石器、2点の石刃、1点の搔器と若干の剝片をその内容とする。遺物の集中の度合は粗である。ブロックの中央B'-19区に疎群を伴う。

CL-1ブロックは、CL-4ブロックの北北東5mの距離にある。台地中央部のやや南斜する平坦地に位置する。A'-18・19～B'-18区を集中地点とする。6点のナイフ形石器、1点の搔器、3点の石核と若干の剝片をその内容とする。全体的に石器類の散布はまばらである。A'-19区出土の、昭和51年度山形県教育委員会文化課の資料も、このブロックの構成にふくまれるものと考える。

CL-5ブロックは、台地の平坦面の西端、ゆるやかに西斜する傾斜変換点に位置する。CL-4ブロックの西北約4mの場所である。W-18・19～X-18・19区に集中地点をもつ。CL-1・2・3の各ブロックと比較すると、遺物の分布はやや疎である。3点のナ



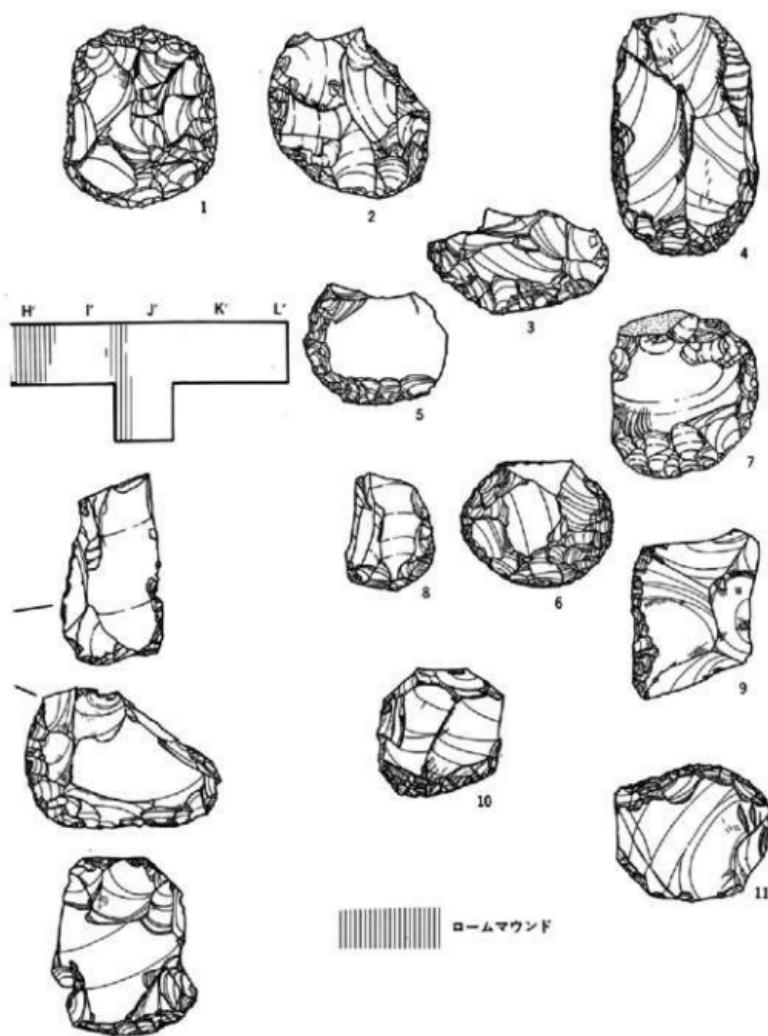


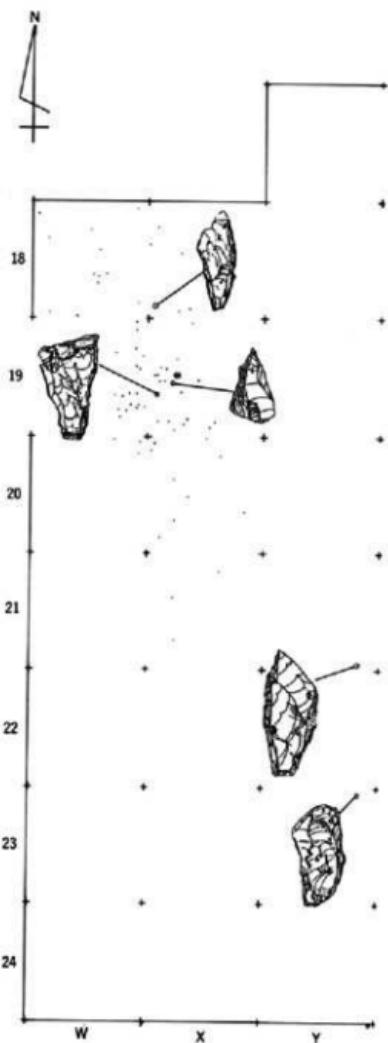
図54 弓張平B遺跡中央区CU-1～6ブロック平面分布図

イフ形石器、1点の石核と若干の剝片が出土した。ブロックはなお北西にわずか拡がるとみられる。ブロック内に礫はない。

CL-6ブロックとしたのは、CL-4ブロックの南南西に約3m距ったY-22・23区から単独に出土した2点のナイフ形石器を1つのまとまりと推測したことである。

各ブロックの土層中の垂直分布は、CL-3、5ブロックは約10cm前後、CL-1は20cm前後、CL-2はその中間ぐらいをしめている。CL-2・3ブロックはそれぞれ礫群をつつみこんでいるわけだが、それらの礫群はいずれも遺物の集中する面から5cm前後下にある。礫群の位置した層位は第IV層上面である。ただCL-4ブロックの礫群だけがすでに第I層中から検出されはじめ、以下連続して4層までにいたった。高低差は30cm前後あった。CL-2・3ブロックの礫群はほぼ水平の分布をみせ、1m内外の円形内にまとまっている。いずれの礫群も焼けた痕のみられる礫や、割れている礫が多く、付近には炭化物の集中も見られた。それに比較すればCL-4ブロックの礫群は大ぶりの礫が多い。おのののブロックおよび礫群の母岩別資料の接合をおこなっていないので、現段階では相互の関連は明らかでない。

中央区下層の各ブロックは、ちょうどCL-4ブロックを中心に径7mほどの範囲に発見された。各ブロックに共通するのは黒曜石製のナイフ形石器である。38~41頁で分類した2~6類の5つのナイフ形石器群は一群の組成とみとめられる。したがって、各ブロッ



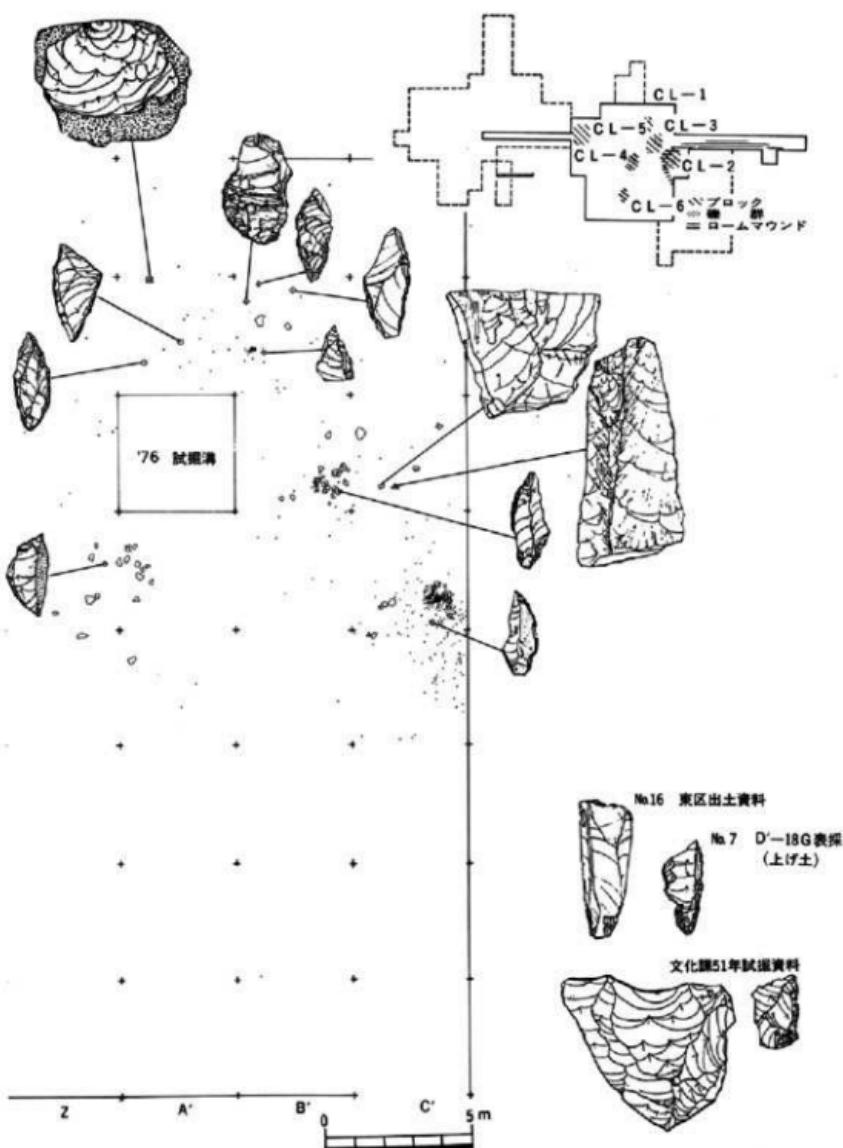


図55 弓張平B遺跡中央区CL-1～5ブロック平面分布図

表-4 ブロック別石器組成表

| 石器名 | | 有舌 | 有目 | 木製形 | 大型尖頭器 | 石鏟 | 石斧 | 石錐 | 圓底狀器 | 網罟器 | ナイフ | 彫刻石器 | 石刃 | 彫刻石器 | 瓦状器 | 磨石 | 石台 | 石器 | 備考 |
|-------|----|----|----|-----|-------|------|------|----|------|-----|-----|------|----|------|-----|----|----|----|----|
| ブロック名 | 番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WS-1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| W-1 | 8 | 1 | 3 | | | | | | 3 | 4 | 2 | | | | | 1 | | | |
| W-2 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| W-3 | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| W-4 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| W-5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CU-1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| CU-2 | | | | | | 1(?) | | | | | | | | | | | | | |
| CU-3 | | | | | | 1(?) | 1(?) | 3 | 12 | 5 | | | | | | 2 | | | |
| CU-5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CU-6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| P-1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CL-1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | 6 | | | | |
| CL-2 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| CL-3 | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | |
| CL-4 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| CL-5 | | | | | | | | | | | 1 | 3 | | | | | | | |
| CL-6 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | 2 | |

(注) P-1st, CU-3ブロックの特徴の記述である。

クの成立はあまり時間のへだたりがないと考える。礫群を伴うブロック、伴わないブロック、剝片の多いブロック、疎なブロック、まったく伴わないブロックがある。こうした内容からみて、CL-1・2・3・5の各ブロックは石器製作の場でもあり、とくにCL-1・2ブロックには石核が集中して発見された。一方、CL-4・6の両ブロックは剝片類はみられない。食料の準備をふくむ日常生活の場とみたい。そして礫群は一般にバーベキューと理解されている。調理・食事の場であったろう。中央区下層のブロックは一つないしそれ以上のユニットととらえられようが、母岩別資料の接合などの分析手続きを終えてない。一般的傾向としては北半の部分が石器製作の場で、南半が日常生活の場と考えている。

ここで発見されたユニットに尖頭器が組成するかどうか不明であるが、全体としてまとまつた石器群とみておきたい。先に述べたように、南関東の終末期のナイフ形石器群、たとえば東京都鈴木遺跡や前原遺跡などの第IV層上部の石器群に関連するだろうと予測している。東北地方では、福島県いわき市大畑遺跡や耶麻郡高郷村塩坪遺跡のナイフ形石器の一部にちかい。弓張平B遺跡中央区で散発的ながら出土した硬質頁岩製のナイフ形石器や角形彫刻刀なども黒耀石製ナイフ形石器群に年代的にちかいと考える。寒河江川流域では、西川町根子遺跡のナイフ形石器文化が、やや近い年代かと見られる。根子遺跡には尖頭器がある（『1・2次調査報告書』）。

（加藤 稔）

（文 献）

- 荒木利見（1972）「西川町大井沢根子遺跡のナイフ形石器」『寒河江考古』3、1—2頁。
原川虎夫・原川雄二・山内幹夫（1983）『東北地方南部阿武隈山地東縁における先土器時代遺跡群』
福島県教育委員会（1983）『塩坪遺跡発掘調査概報（福島県立博物館調査報告第3集）』
柏倉亮吉・加藤 稔（1967）『山形県下の洞穴遺跡』『日本の洞穴遺跡』57—65頁。
永山 亘（1980）「大畑日記—ナイフ形石器発見の前後—」『福島考古』21、39—43頁。
小田静夫・伊藤富治夫・C. T. キーリー編（1976）『前原遺跡』I・II。
鈴木遺跡調査団（1978—81）『鈴木遺跡』I—IV。

7 最上川・荒川流域のナイフ形石器について

弓張平B遺跡の発掘で、最上川、荒川流域では珍しく旧・中石器群が層位的に検出された。このうち中層の尖頭器群の性格については、『第1・2次報告』に触れた。今回は下層のナイフ形石器について考えてみたい。

形態面からみたナイフ形石器の特徴は、ブランティング(blunting)すなわち刃潰し加工の規則性にある。ここでは、とりあえず、従来からこの地方でナイフ形石器（以下ナイフと略称する）と呼び慣らしてきた石器群をも加えて考察の対象とする。

ナイフ形石器の素材は、縦長剥片、石刃と横長剥片とである。この地方のナイフの大半は石刃素材で、かつ主にその基部を加工した石器である。

A 小国町横道遺跡（加藤・佐藤 1963）

単設もしくは両設の打面をもつ中型の石刃核から剥離された石刃を素材とする。ナイフのI類型は、細長い石刃の打面を基部とし、基部両側縁の先端の一側縁全体を加工し、腹面にも打瘤剥取の調整がある。「杉久保I型ナイフ」の一員である。III類型は、両側縁部を加工したいわゆる「茂呂系ナイフ」の仲間である。

横道では、「神山型」をふくむ多数の彫刻刀形石器が組成されている。幅広先刃の先端に抉入状調整をし、これを打面に垂直な彫刻刀面を入れたいわゆる「小坂型」の類品もある。搔器は少い。

B 寒河江市金谷原遺跡（渋谷 1976）

単設打面の石刃核から剥離された石刃を素材とする。先端方向からの逆剥離面ある、つまり、両設打面痕跡のみられる石刃は少なく、石刃核もまた東山や横前のような円筒形になることは少ない。

ナイフのI類型は石刃の基部両側縁と先端一側縁にのみ加工あるものである。形態は横道の「杉久保型」と類似するが、大小様々、腹面の打瘤剥取調整ではなく、また基部加工の一方は腹面→背面の他の方は背面→腹面の加擊で、錯向剥離的な加工のものが目立つ。基部の尖らぬものもある。「金谷原型」と仮称してきた。IV類型は、二側縁加工ある「切出形石器」の仲間である。

彫刻刀は、石刃打点側の背面に抉り入りの調整をし、それを打面とし反対側の腹面に斜めに彫刻刀面を入れた。だから刃先を上から見るとZ字状を呈するものがあるが、素材の利用法で「神山型」と区別される。「小坂型」の類品もある。搔器は少い。

C 新庄市南野遺跡（大友・本間・長沢 1977）

石刃素材。石刃核は両設打面をもつ円筒形。ナイフのひとつの類型は基部の両側縁と先

端一側縁に加工あるもので、先端の整形は急角度の厚形細部調整である。もう一方は同様加工のもので、先端の加工が薄形調整のものと区別される。それぞれ南野のa、b型としておこう。

彫刻刀は「小坂型」が圧倒的に多く、搔器は先刃式の大型品（長さ8～12cm）が多い。他に腹面に周辺加工ある石刃素材の尖頭器がみられる。

D 真室川町小林遺跡（長沢 1978）

背面に礫面を残す单設打面円錐形の石刃核から剥離された中型石刃が素材。I類型ナイフは基部両側縁と先端一側縁に加工あるもので、先端加工は薄形調整である。III類型ナイフは、基部両側縁と石刃の一側縁全体に加工したもので、一側縁の整形は急角度の厚形調整である。

彫刻刀の形態はよく判らない。搔器は先刃式（長さ5～7cm）である。

E 小国町平林遺跡（加藤 1963）

剝片剥離技術は石刃技法で、石刃核は一般に背面に礫面を残す单設打面の半円錐形である。稀に両設打面の痕跡を残す石刃もある。ナイフのI類型は石刃の基部周辺と先端一側縁に加工あるもの、III類型は基部周辺と一側縁全部に加工あるもの、VII類型は石刃の先端部を切断したものである。素材が幅広なI・III類型を「平林型ナイフ」と仮称してきた。

彫刻刀は「平坦型」がみられ、搔器はすべて先刃式で、量的に多い。片面加工、半両面加工、両面加工の尖頭器を伴う。

つぎに、石刃素材の「三叉稜形」（II類型）ナイフについて述べる。

F 小国町東山遺跡（加藤・佐々木 1978）

背面に礫面を残した、円筒形の両設打面をもった大型の石刃核から剥離された石刃を素材とする。多くは両設打面の痕跡がある。ナイフのII類型は、基部両側縁と先端の一側縁に加工のあるもので、先端に大きな抉入状の逆剥離面をもつ。「東山型ナイフ（小国・東山型）」とよんできた。

定形的な彫刻刀は少なく、逆に石刃素材の継形（先刃式）搔器が多く組成する。大小二種あり、刃部断面は薄型と厚型がある。

G 新庄市横前遺跡（加藤 1964）

両設打面ある円筒形石刃核から剥離された石刃素材。ナイフII類型は、基部両側と先端一側縁に加工があり、「東山型」のように先端は三叉稜形をなす。「新庄・東山型」という。それとは異って先端中央が尖頭状を呈するI類型もある。

彫刻刀は「小坂型」をふくむ。搔器は先刃式で東山同様大・小の二種がある。

最後に特異なナイフに触れておく。

H 越中山K遺跡（加藤 1975）

剝片剝離技術は、二つの傾向に分けられる。一つは縦長剝片剝離技法で、他は「瀬戸内技法」である。後者の方法で剝離された翼状剝片を利用したVI類型の「国府型ナイフ」がある。他に寸詰りの台形状の剝片の一側縁を刃部とし、他を加工したV類型のものがある。

彫刻刀には石刃素材の「神山型」類品がある。搔器、削器の他に、特徴的な石器として小型の断面三角形の石器がある。錐や鋸歯縁石器もある。

I 越中山A'遺跡（加藤 1975）

両設打面をもつ石刃核から剝離された整った石刃を素材とするナイフにちかい石器がある。先端部の刃潰し加工は顯著でなく一側縁の中央ちかくにあるものや腹面に加工痕のみられるものもある。形は「新庄・東山型」に似る（I類型）。細石刃期の小国町湯ノ花遺跡にもある。他に台形状の石器がある。V類型に含めておこう。

以上のはか、ナイフを出土した遺跡はかなりの数にのぼるが、それらは上述の諸遺跡の各類型に包含されるので記述を省く。

さて、ここで弓張平B遺跡下層のナイフを見ると、I類型の基部両側縁と先端一側縁加工のナイフ、III類型の二側縁加工の茂呂系ナイフおよびIV類型の切出形石器、そしてII類型の「小国・東山型」がある。前三者は確実に併出した。後一者は異なるユニットだが、年代的にはちかいと判断している。

小型の、腹面にも加工ある搔器（図43—2）が前三者と共存した。

これらのナイフは、つぎのようにまとめられる。

- (1) 素材となった剝片の剝離技術に注目すると、① 金谷原にみられる単設打面からの石刃技法による金谷原石器群、② 平林にみられる寸詰りの、単設打面の石刃核をもつ石刃技法による平林石器群と小林石器群、③ 両設打面からの石刃技法による横道石器群、④ 東山にみられる両設打面の円筒形石刃核をもつ石刃技法による東山石器群と横前石器群および南野石器群、⑤ 越中山A'にみられる、石刃技法と共に存した越中山A'石器群や湯の花石器群、そして⑥ 瀬戸内技法による越中山K石器群の6群に大別できる。なお、弓張平B石器群の剝離技術はこれらのうち②にちかい。
- (2) 渋谷孝雄は、東北地方での四種の石刃技法を、I 岩井沢石刃技法、II 金谷原石刃技法、III 樽岸石刃技法、IV 越中山A'石刃技法、とし、これは I → IV と変遷するとしたが、平林石刃技法がどこに介在するか明らかにしていない。技法としては岩井沢石刃技法にちかいのではと私考するが、年代的関係は不明である。山形県岩井沢の

| | | | | | | | | | | |
|----------|------|----|-----|----|----|----|----|----|------|-------|
| I(A) | | | | | | | | | | |
| II(A) | | | | | | | | | | |
| III(B) | | | ○ | | | | | | | |
| IV(C) | | | | ○ | | | | | | |
| V(D) | | | | | | | | | | |
| VI(E) | | | | | | | | | | |
| VII(F) | | | | | | | | | | |
| | | | ○ | | | | | | | |
| 類型 遺跡 | 弓張平B | 横道 | 金谷原 | 南野 | 小林 | 平林 | 東山 | 横前 | 越中山K | 越中山A' |

図56 最上川・荒川流域のナイフ形石器
(縮尺不同、○は共伴をしめす)

石刃技法は礫山技法に似るもの、両者は区別できるだろうと考えている。

- (3) 石器群の組成からすると、まず槍先形尖頭器出現以前のナイフ形石器群として、A：横道・金谷原・越中山Kが確実で、B：小林・平林と東山・横前・南野は尖頭器と共に存したかまたはその可能性が多く、C：越中山A'・湯の花は両面調整尖頭器や細石刃に伴う。弓張平BはBグループにちかい。

A群は、定形的先刃式搔器出現以前のものである。さらに搔器を伴うB群は、①搔器のみの小林・平林石器群と、②搔器と小坂型彫刻刀をも伴う東山・横前・南野に二分できる。弓張平Bは②にちかい。

結論を急ぐと、この地方のナイフ形石器はA群→C群の年代的変遷を辿ったとみる。その時間的先後関係はさらに細別できるものであろう。たとえば横道→金谷原の関係は、ほぼ確実かと私考する。弓張平B石器群はC群ではないが、A、B群の剥片剝離技術とは異質である。今のところ別系統の技術伝統と考えられ、その年代的位置付けおよび系譜の問題は今後の課題である。

(加藤 稔)

(文 献)

- 安蒜政雄 (1979) 「石器の形態と機能」『日本考古学を学ぶ』(2) 17-39頁
加藤 稔・佐藤禎宏 (1963) 「山形県横道遺跡略報」『石器時代』6 22-39頁
渋谷孝雄 (1976) 「金谷原遺跡の石刃技法の分析」『山形考古』II-4 15-38頁
大友義助・本間敬義・長沢正義 (1977) 「南野遺跡発掘調査報告書」
長沢正機 (1978) 「真室川町小林遺跡の旧石器群」『山形考古』II-3, 77-83頁
加藤 稔 (1963) 「山形県平林の石器文化」『考古学集刊』II-1, 1-16頁
加藤 稔・佐々木洋治 (1978) 「山形県小国町東山発見の旧石器群」『山形考古』II-3, 84-96頁
加藤 稔 (1964) 「山屋・東山遺跡一新庄盆地東縁部の先繩文時代遺跡予報一」
加藤 稔 (1975) 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2, 112-137頁

8 あとがき

山形県西村山郡西川町に所在する弓張平B遺跡の考古学的調査は、1976（昭51）年山形県教育委員会の予備調査で着手された。

翌1977（昭52）年の夏と秋に第1・2次調査が実施され、本格的な調査のメスがいれられた。つづいて、1978（昭53）年の夏および秋に続行された第3・4次調査の結果、弓張平B遺跡の規模、構造、性格がかなり具体的に把握されることとなった。

同時に、まだ調査は完了していないので、B遺跡の全貌を解明しきれず、新たな未解決の課題も残した。1～2次調査もふくめ、3～4次調査の結果、われわれ調査団が確認した総合所見は以下のとおりである。

①遺跡の立地と範囲

弓張平B遺跡の位置とその水平的なひろがりがほぼ確認された。遺跡は弓張平の西斜面を北上する現国道112号線の東約80mの台地の稜線を中心に営なまれていた。有舌尖頭器を出土した西区は、この小台地の平坦面から傾斜変換線付近に位置していた。また、ナイフ形石器等を出土した中央区は、台地の稜線を中心とした平坦部に位置していた。それぞれの石器時代文化遺跡が立地した地形との微妙なかかわりあいは、弓張平B遺跡のブロック論を展開するうえで、いくつかの示唆を与えた。

遺跡の規模は、当初東西150m、南北180m、総面積2700m²と推定された。

しかし、西区、中央区、北区、南西区、南区のトレンチを拡張して調査した結果、最終的には東西60m、南北約80m、総面積約5000m²と測定された。調査総面積は818m²に達したが、遺跡推定面積の約16%にすぎない。遺跡の北縁、東縁はほぼ確定したが、南縁は未確定であり、西縁は宅地造成による台地の削平により確認は不可能であった。

約50日、合計204.5グリッド、818m²を調査した第1～4次調査の発掘面積は下表のとおりである。

| 調査 発掘区 | 西 区 | 中 央 区 | 北 区 | 南 西 区 | 南 区 | 計 |
|-----------|-----|-------|-----|-------|-----|-------------------|
| 1・2次 | 124 | 128 | 40 | 44 | 36 | 372m ² |
| 3・4次 | 168 | 252 | | 26 | | 446m ² |
| 計 | 292 | 380 | 40 | 70 | 36 | 818m ² |

②層位と文化層

第3～4次調査の結果、弓張平B遺跡には4期の文化層が存在することが明らかになった。

層位と文化層（遺物）との関係はつぎのように整理された。

〈第Ⅰ層〉 黒ボクを主とする耕土。0～13cm。この層は本来の第Ⅰ層の黒ボク土と本来は第Ⅱ層上部のローム質土壤とが混在している。この層にふくまれる文化層を第一文化層とよぶ。縄文時代前期初頭の室浜式期の遺物・遺構である。この時期の遺物はB遺跡の全域に散布しているが、この文化層をもっともよく保存していたのが西南区である。ここでは配石遺構（炉）が検出されたが竪穴住居は確認できなかった。

〈第Ⅱ層〉 赤褐色粘土。13～39cm。粘土、シルトからなるローム層である。第Ⅱ層には2つの文化層がみとめられた。Ⅱ層上部では石鎌・剝片尖頭器・搔器・削器が出土した。中央区の5つのブロックと西区の2つのブロックもふくめて、これを第Ⅱ文化層とよぶ。石鎌や尖頭器は高畠町の火箱岩洞穴最下層や同町尼子第Ⅱ岩陰の第V層のものと共通する。弓張平では出土しなかったが、隆起線文土器文化の階梯に比定される。

第Ⅱ層中～下部にかけて発見された有舌尖頭器を主体とする石器文化を第Ⅲ文化層とよぶ。西区のW1～W3ブロックがこの文化層を代表する。W1ブロックでは有舌尖頭器、大型尖頭器、縦形搔器などの完成ないし半完成品石器が2,000点をこす数ミリの細片と共存した。石器の仕上げ工房跡と考えられる。隣接するW2ブロック出土の剝片がW1ブロックの剝片と接合した資料があり、統じてW2は石器の素材作出場と考えられる。W3ブロックから長さ18cmにおよぶ大型の月桂樹葉形尖頭器が出土した。長野県神子柴遺跡の尖頭器をおもわせる。第Ⅲ文化層には土器、細石刃はない。越中山A遺跡の石器群との関連も考えられる部分がある。W1・2ブロックとW3ブロックがはたして同時期の所産であるかどうかはなお検討の余地はある。

〈第Ⅲ層〉 黄褐色粘土。39～64cm。ナイフ形石器・切出形石器・搔器・石核が発見された。素材の大半は黒曜石である。これを第Ⅳ文化層とよぶ。中央区にこの文化層がみとめられた。とくに、切断技法をもつ黒曜石製の小型ナイフ形石器の系譜についての追跡は今後の課題である。

③調査の意義

弓張平B遺跡は、単純文化遺跡ではなくてかなり長期にわたる複合遺跡であることが判明した。第1～2次調査では3枚の文化層を検出したが、第3～4次調査の結果、合計4枚の文化層が存在することがあきらかになった。ナイフ形石器文化の終末期から有舌尖頭器文化・縄文時代早期初頭、同前期前葉にいたるまで石器時代人の生活が営々として続けられたことが判明した。

東日本の後期旧石器時代から中石器時代、新石器時代への過渡期の石器文化が層位的に

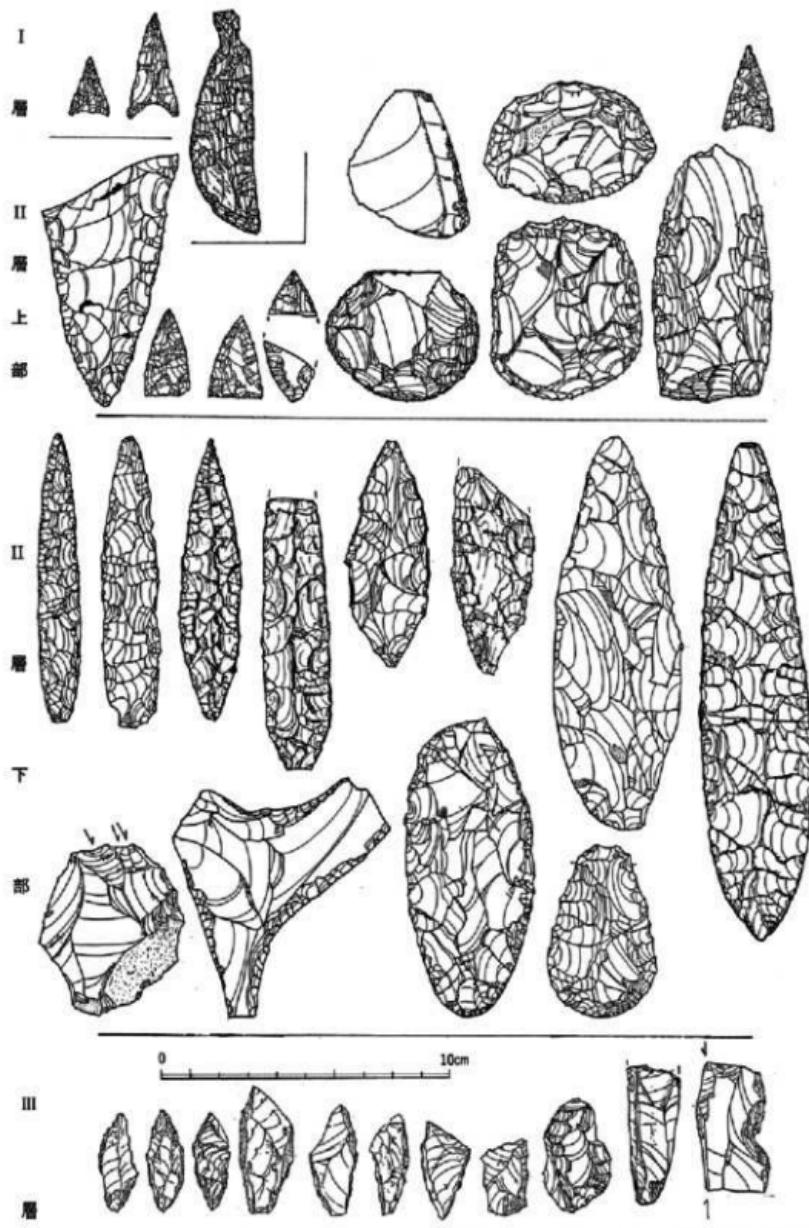


図57 弓張平B遺跡の石器文化の編年

集中、連続して発見された。この時期の文化的な変貌をかなり具体的にわれわれに教示した。ここに弓張平B遺跡の調査がもつ学術的意義がある。

いくつかの新知見を提供した弓張平B遺跡は、月山火山周辺のローム層の研究など地質学的研究に資するところも大きい。

この稀有の大遺跡は、1979年の県教育委員会による第5次調査終了直後公用施設の造営により壊滅した。弓張平の高原台にきざまれた遺跡はわれわれの眼前から消えた。しかし、弓張平B遺跡の石器文化は研究史にその光芒を放つだろう。　（宇野修平・荒木利見）

（文 献）

山形県教育委員会（1977）『分布調査報告書(5)—弓張平公園関係遺跡—(山形県埋蔵文化財調査報告書第13集)』

山形県教育委員会・弓張平遺跡調査団（1978）『弓張平遺跡—第1、2次調査報告書—(山形県埋蔵文化財調査報告書第15集)』

山形県教育委員会・弓張平遺跡調査団（1979）『弓張平B遺跡—第3、4次発掘調査報告書—(山形県埋蔵文化財調査報告書第21集)』

山形県教育委員会（1979）『西川町弓張平B遺跡・第5次調査説明資料』

山形県教育委員会（1980）『弓張平B遺跡—第5次発掘調査報告書—(山形県埋蔵文化財調査報告書第28集)』

加藤 稔（1980）「山形県弓張平B遺跡」『日本考古学年報31・1978年度版』33—38頁

加藤 稔（1983）「山形県弓張平遺跡—有茎尖頭器をめぐる問題—」「探訪先土器の遺跡」137—144頁

□ 昭和53年弓張平B遺跡発掘調査参加者名表（順不同）

| | | | |
|-------|--|--|---|
| 調査員 | 加藤 稔 荒木 利見 佐藤 庄一 | 宇野 修平 山中 一郎 佐藤 正俊 | 高橋 郁夫 川崎 利夫 佐藤 義信 |
| 調査補助員 | 会田 容弘 矢口 広道 及川 智子 鈴木 美恵子 信田 由美子 葛巻 篤 柴田 利広 加藤 わかな | 青木 敏雄 山口 博之 京谷 彰子 田城 裕子 浜田 さよ子 小林 公二 高橋 昭一 | 荒井 格 浅賀 喜悦 草間 耕一 沼沢 美代子 青砥 浩一 桜井 信也 石橋 峰幸 |
| 作業員 | 小川 雄一 木村 益恵 古沢 忠次郎 | 奥山 晴美 鈴木 すみ子 古沢 まさの | 木村 利吉 古沢 新太郎 渡辺辰三 |
| 特別参加者 | 米地 文夫 阿部 明彦 | 渋谷 孝雄 中山 芳昭 | 柳沢 みどり 永井 節子 |

山形県埋蔵文化財調査報告書第21集

弓張平B遺跡

第3・4次発掘調査報告書

昭和54年3月25日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 (株) 大風印刷

裏表紙のマークは昭和41年5月に定められた「文化財愛護のシンボルマーク」です。このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱とうこう（組みもの）のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

